
夜を越えて巡る朝

トウリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜を越えて巡る朝

【Nコード】

N1494Z

【作者名】

トウリン

【あらすじ】

少年は生きる意味も目的も知らず、ただ糧を得る為だけに戦っていた。少女はその強大な力故に恐れられ、隔絶された檻の中で、ただ言われるがままに戦っていた。

傭兵省吾は志しもなく反乱軍に身を投じ、そこで「紅い目の魔女」と呼ばれる少女イチに出会う。その美しいが何も映さない眼差しに囚われ、省吾は初めて何かを欲した。そしてイチもまた、己に伸ばされた手に、怯えながらも惹かれていく。

本編は少年が少女と出会い、彼女を手に入れて旅立つまで、を書き

ました。サイドストーリーで後日譚を入れていきます。
のべぷろ！(<http://www.novepro.jp>)とブ
ログに投稿した作品です。

序

生命の息吹を感じさせる色彩が消え失せた大地に、遙か上空の飛行機から、円筒が幾つも幾つも落とされる。地上には、もう、燃えるものなど何一つ無いというのに、その円筒が地面に激突すると同時にパツと朱の花が咲いた。その炎に照らされて、真夜中だというのに、昼のような明るさ。

昨日までは確かにあった小さな村も、今は跡形も無い。

彼女の血の色を透かした瞳を疎んじ、石を投げ付けてきた村人も、もういなかった。

何故、自分だけが生きているのだろう。

彼女には、それを疑問に思う余裕は無かった。あたり一面火の海で、頭からすっぽりと被った汚いぼろ布に火の粉が飛び移らない事を不思議に思うことすら、なかった。

むせるような熱気に、息が詰まる。吸った空気は喉を焼いた。と、突然。

キーンと、耳ではなく頭に、人の可聴域を超えた音が響く。彼女の本能はそれが上空からのものだとかえ、反射的に振り仰いだ。

炎の色よりも深いその真紅の瞳が、大きく見開かれる。頭上には、燃料の詰まった円筒が迫っていた。

目を逸らすことも、その場から逃げ出すこともできない。

もう、終わりだ。

絶望的な思いと共に、どこか安堵する気持ちもあった。

円筒が実際に風を切る音が、今度こそ、彼女の耳に届く。

終焉まで、あと一秒。

その時、何の意識もしないまま、彼女の頭の中で何かが弾けた。全ては瞬きにも満たない瞬間のうちに終わった。

そして、それと同時に彼女の意識は失われる。彼女は、自分の

身に何が起きたのか、自分が何をしたのか、知ることはできなかった。

彼女の他にこの地上に生きているものは無く、その時起きたことを見た者はいないかと、思われた。

しかし、空から焼夷弾を振り撒いていた人物は、見ていたのだ。自分の落とした爆弾の威力を確かめようと下を覗いていた、パイロットだけは。

残敵の掃討に駆り出されるような一兵卒に過ぎないキーツ・アンドロフは、その時見た現象を永遠の眠りに就くその時まで忘れることができなかった。真っ直ぐに落ち、地面に触れると同時に炎を上げる筈の焼夷弾は、しかしそうなることは無く、まるで見えない巨大な指でも存在したかのように、真横に弾かれたのだ。

彼は暫らくその場を旋回してみたが、上から見ていただけでは埒が明かない。意を決して、炎に巻かれないよう、少し離れたところに着陸する。

火の激しい場所を避けつつ、目的の地点へ急ぐ。

「うわ……っと、危ねえ……」

火だけに注意していた彼は、危うく、足元に転がっていた焼夷弾を蹴り飛ばしそうになった。

不発弾。

例の弾に違いない。

更に足を進める。

そして、見えたもの。

先ほどは、キーツは自分の目が信じられなかったが、今度は、自分の頭が信じられなかった。

この戦場で、ついに正気を失ってしまったのだろうか。

檻褸切れに包まれて倒れ伏しているのは、どう見ても五歳ぐらいの幼女だった。燃え盛る炎は、彼女を避けてきれいに円を描いている。その現象も異様であったが、そもそも、この火の海でこんな子供が独りきりでどうして生きていられるのか。

『普通』では有り得なかった。

キーツの見つめる中、その視線を感じたのか、彼女が小さく身動きをした。それに合わせるように、炎が揺らぐ。

彼は、この幼女が自分のこれまでの人生を一新させる為の踏み台となってくれることを直感した。恐る恐る手を伸ばし、抱き上げる。子供は、軽かった。

省吾しやうごは独りだった。

本当の親のことは全く記憶に無い。覚えている一番古いことは、食べる物、そして寝る場所を探して彷徨っていたことであり、そこに両親は存在しない。

国と国との間で飽きることなく繰り返される大小の戦火。それから逃れた人々が身を寄せ合った小さな村で、省吾は育った。

そんな小さな村なら、互いに助け合って生活しているものだと思う者もいるかもしれない。しかし、絶え間なく続く戦争は物理的にも精神的にも人々を飢えさせ、身寄りの無い子供のことを気遣うような余裕など残されてはいなかった。

貧弱な品揃えの店先から食べ物にくすね、時には痩せ細った家畜を襲い、省吾はその日その日を食い繋いだものだった。そんな野良猫のような生活に終止符が打たれたのは、ある冬の日。

いつものように、屋台の親父が背を向けた隙を狙って伸ばされた省吾の腕を、背後から伸びた手が捻り上げたのだ。村人たちは省吾が村に留まることを許さず、村からはなれた森へと連れて行き、そこに置き去りにした。

身を守る術さえ持たない子供が、飢えた獣のうろつく森の中、どうして生き延びられようか。それは実質的には死刑に等しく、幼い子供に直接手を下す罪悪感から目を逸らしただけに過ぎない。

炎すら凍り付きそうな真冬の日、省吾は眩暈を覚えるほどの空腹を抱えて、森の中を彷徨った。

そして見つけた、粗末な小屋。

何かほんの少しでも飢えを凌げるものがあればと忍び込んだその小屋にいたのが、彼をこの年まで生き延びさせることになる術を教えてくれた、老いた元傭兵だった。

男は、出会った時にはすでに六十を超えていたであろう。対する

省吾は、まだ幼い子供に過ぎなかった。恐らく、五歳か六歳　省吾は、自分の生まれた年を知らなかった。

それから、およそ六年。

その年月の間に、老人はいつたい省吾の何処を気に入ったのか、孫にも等しいほどの子供でしかない省吾に、彼の持つ技術の全てを注ぎ込んだ。

老人がまさに眠るように息を引き取ったのは、一年ほど前のことである。朝食の用意ができたと告げに行き、省吾は冷たくなった老人を見ることになった。

庭に墓穴を掘り、抱え上げた老人の身体の軽さに戸惑いながら、そこに横たえた。墓標代わりに地面に突き刺した木片には、何も刻んでこなかった。

その老人は、最期まで名前を教えてはくれなかったのだ。

彼を弔った翌日、省吾はその小屋を後にした。

彼の持っているものといえば、戦う為の知識と技量のみ。そして、荒んだ戦場では兵士の年齢が取り沙汰されることはなかった。省吾は迷わずその道を選び　恐らく現役の頃は名を馳せた傭兵だったに違いない老人が持っていたものをほぼ完璧に受け継いだ省吾は、今、傭兵仲間でも一目置かれる存在となっている。

*

「おい、シヨウ。こつち来て一緒に呑めよ」

酔っ払いの胴間声で賑わう酒の席で声を掛けてきたのは、大柄な傭兵の中でも特に際立つ体躯を持った男であった。省吾はしばし記憶を巡らし、彼の名を探す。

確か

「けいしやう勁捷……」

「おや、俺の名を覚えてくれたのか。嬉しいねえ」

心底からそう思っているらしく、男は満面に笑みを浮かべてそう

答える。

あれだけ付き纏われればな。

内心の呟きを無表情で隠し、省吾は肩を竦めた。

この世界に足を踏み入れたから一年ほどになるが、積極的に話しかけてきたのは、この勁捷なる男が初めてである。

新しい仕事が入った前祝で盛り上がるオヤジのもと、省吾の周囲を取り囲む空気は何か違っていた。浮いていると言っても良い。それが、否が応でも男どもの目を引いた。ほんのわずかな隙でもあれば、省吾の周りにはむさ苦しい奴らが群がっていたことだろう。それをさせなかったのは、ひとえに、省吾の得体の知れなさ故であつた。

先行した噂が果たして真実なのか、それを知るには実際に戦場を共にするしかない。逆に言えば、わずかな実戦でそれほどまでに取り沙汰されるのがその証明であるのかもしれないが。

とにかく、そのような諸々の理由から、省吾は遠巻きに眺められる存在であつたのである。

宴も半ばにして声を掛けてきた唯一の男に対して、省吾は自分の杯を示し、きちんと呑んでいるということを暗に主張する。実際、すでに大ジョッキで六杯目に差し掛かっているところである。元傭兵の老人は、少年に酒の呑み方まで教えてくれていた。

「お前なあ、酒つてえのは雰囲気で呑むもんだぜ？独りで呑んでもちつとも旨くなんかねえだろ。若いんだからなあ、パーツとやれよ、パーツと！」

七日も生活を共にしていれば省吾の性格も把握されてくるのだろうが、如何せん、今日が初お目見えの者が殆どというこの酒盛りである。未だ成長期も終わっていないようなお子様がいい肴にならないわけが無い。

確かに省吾の名前はかなり知られている。だが、その名の売れ方に比して、あまりに省吾は『可愛い』過ぎた。よくよく見れば、その荒んだ目付きに気付くが、一見したただけでは人畜無害なただの子

供にしか見えない。

男どもにしても、仲間の噂を軽んじるわけではないが、いざ実物を目の前にしてみると、ガセではないのかという疑惑が浮かんでくるのを抑えることは難しいのだろう。

好奇心に満ち満ちた視線が、省吾に集中する。

省吾はその疑惑を払拭すべく、差し出された杯を受け取った。そして苦も無くそれを呑み干す。

中身は、大の大人でも一息に呷ることは無い、強さで有名な蒸留酒である。見守っていた野郎どもの間から、感嘆のどよめきが沸き立つのも無理は無かった。

「やるなあ、おい」

心底からの感嘆の声を上げた勁捷に、省吾は小さく肩を竦める。いつもながら、何がそれほどまでに男たちを感心させるのか、さっぱり解らなかった。

自分の姿が目の前にいるこの男のようなものだったら、もっと驚きは少ないのではないだろうか。敵を欺くにはうってつけなのだが、こういう時、なかなか成長しない自分の身体が、省吾には何だか悔しかった。

何処と無く仏頂面になった省吾を、勁捷がどこか面白そうに横目で見る。

「お前さ、『仲間』を信用してないだろ」

言われた台詞が一瞬掴めなくて、省吾は怪訝な顔をした。これから共に戦おうという者たちを信用していないわけがない。確かに、傭兵などいつ敵味方に分かれるかが判らない職業ではあるが、それでも、一度同じ雇い主の元に付いたら、相手を信じなければ、とてもではないがやっていられない。

「仲間は信じるもんだろ」

愛想もクソも無い声で省吾が言うのへ、勁捷が喉の奥で笑う。

「酔えねえってことは、信じてねえってことだよ。もっと余裕ってもんを持ちな。せっかくいい腕してんだからよ」

自分の倍は生きているであろう男の言葉に、省吾は返せるものがない。

殆ど変わらない少年の表情の中に微かによぎった悔しさを、勁捷は見逃さなかった。羨ましいほどの青臭さに笑い出してしまいそうになるのを、彼は懸命に堪える。そんなことをすれば省吾が青筋を立てるのは目に見えていた。

「ま、どうせ何時死ぬか判らんこの稼業だ。気楽に行こうぜ、気楽によ。人生、楽しんだもん勝ちだぜ」

勁捷は手の平を広げて、省吾のまだ成長不十分な背中を叩く。思ったよりも骨張ったそれに、勁捷はふと、省吾が無口な理由に思い当たる。

先ほど聞いた、省吾の声。それは未だ声変わりを終えていなかった。

華奢ではあるが、すらりと伸びた四肢と大きな手足は、少年がまだこれからであることを示している。だが、それはすでに成長を終えた者でなければ解らないだろう。

かつては同じ思いを噛み締めたこともある勁捷には、省吾の焦る気持ちに充分に理解できた。

とは言え、若い時の悩みは、当人だけのものである。第三者が何を言おうが、水が油を拒むように、それが染み込むということはないだろう。

人生五十年。そう易々と思うとおりになっただらつまんねえよな。

独りごちて、その人生の半ば以上をすでに過ごしてしまった勁捷は話題を変える。本来こういった場で行われるのは、人生相談ではなく噂話の交換である。全てが真実であるとは限らないが、その『噂』が戦場において命運を分けるということも間々あることだ。

勁捷は眉唾な話をする者がよくそうするように、省吾の顔に自分のそれを近付け、声を潜める。

「なあ、『紅い目の魔女』の話は知ってるか？」

「紅い目の……？」

省吾は記憶を捲った。

「ああ、聞いたことはある」

「一人でバルディアの特殊部隊を壊滅状態にしたらしいよな」

「ガセだろ」

バルディアの特殊部隊といえば、世界で最も恐れられている集団と呼んでも過言ではない。それを、たった一人で……等と、尾ひれが付くにも程がある、と一刀の下に切って捨てた省吾に、勁捷は真っ直ぐに立てた人差し指を振って答える。

「いや、そうでもないらしいんだな、これが。バルディアは隠そうとしているが、かなり痛い目を見たのはホントらしい。まあ、確かにたった一人でお隣さんの取って置きをやっつけたってのは眉唾もんだ。けどな、そういう名の部隊が組まれたってえのは、ありそうな話だろ？」

「部隊……？」

「ま、これは俺の当てずっぽうに過ぎないが、少なくとも、たった一人であのバルディアをやっつけたってのよりは信憑性があるんじゃないかねえの？」

「この国にそれだけの戦力があるってことか？」

「困ったことにな」

台詞とは裏腹な表情で勁捷は言い、杯を干す。

「雇い主はバルディアのことを知っているのか……？」

呟いた省吾に、勁捷は酒瓶を突き出しながら答える。

「知らん筈は無かるう？ 情報収集は戦の最重要事項だぜ。ま、それでもお上に向かって楯突こうってんだから、俺たちの雇い主もなかなか好い度胸してるよな」

「無謀なだけだろ」

つまらなそうにそう言った少年を、勁捷は面白そうに眺める。

「それが判ってて、何でお前はこっちに付いたんだ？ バルディアのことが無くたって、反乱軍なぞ分が悪いもんだと決まってるだろ

うに」

「別に……理由なんか。金さえ払ってくれるなら、他の事はどうでもいい」

「おいおい、その年で。もつと、こう、熱いことは言えねえのか？」
嘆く素振りも大袈裟に、勁捷が首を振る。それ以上男の戯言を続けさせるのも鬱陶しくて、省吾は等閑に問いを投げかけた。

「じゃあ、あんたは？ 何で反乱軍に付いたんだ？」

よもや省吾の方から仕事以外のことについて何かを訊いてくるとは思っていなかった勁捷は一瞬目を丸くし、次いで、ニヤリと笑みを浮かべる。

「俺か？ 俺はな、その方が面白そうだったからだよ。国王側が勝つのは当然のことだろう？ 何せ、元手が違うんだからよ。勝つのが判つてる方に付いてみたつて、つまらねえじゃねえか」

ま、危なくなったらさつさとケツ捲くつて逃げるに限るがな、というのが勁捷の落ちであったが。

果たして何処まで本気なのか。

良く言えば余裕がある、悪く言えばいい加減と称される勁捷の台詞に、省吾は真面目に受け答えることを放棄する。

再びムツツリと黙り込んだ省吾に、勁捷はとうとう大きく笑い声を上げた。

「お前もな、生きる以外に何か見つけろよ。ただ食つて寝るだけじゃあ、人生、結構長いぜ？」

自分の酒盃を少年のそれに軽くぶつけ、一気に中身を呷る。

そんな男を横目で眺めている省吾には、彼の言葉を吸収するのはまだ難しいことだった。

省吾は生きる意味など考えたことがない。彼にとって生きるというのは自分の命を繋ぐこと、それ以上でもそれ以下でもなかった。

物を食べ、凍える心配の無いところで寝る。

それ以上に大切なことなどある筈が無い。

それが、十数年生きてきた省吾の、唯一の信念だった。

『反乱軍』の長、リオン・a・レーヴは、目前に集まった仲間、そして傭兵たちをしっかりとその視界の中に捉え、最初の一言を發した。

「明日、我々は進撃を開始する」

しばし言葉を切り、グルリと一同を見渡す。少なからぬ酒の入った彼らの眼差しは、翌日に戦いを控えているという緊張も相乗して強い光を放っている。

「我々の力は王のものに比べれば、圧倒的に劣る。だが、それを理由に留まるわけにはいかないのだ。ものを見ることのできる眼を、そして、ものを聴くことのできる耳を持っているのなら、この国の圧政に声すら上げられぬ民たちの苦しみを感じることのできぬ者はいないだろう。民一人一人の為だけではなく、この国そのものの為、今を変えなければならぬ。我々が王に刃を向けるのは、この国を愛すればこそである。皆が笑顔で暮らしていける国、それを創る為の礎となるのだ。我々が投じるのは、小指の先ほどの小石に過ぎないのかもしれない。だが、その小石が作る波紋は、いずれ大波となる。我々の肉体が一人残らず斃れることになるうとも、我々の目指すものが正しいものであれば、それは永遠に受け継がれていくだろう。ひとは決して飼い慣らされた羊とは成り得ない。独裁は、人間本来の在り方ではないのだ」

口を閉ざし、軽く眼を伏せた。皆、身動き一つせず耳を傾けている。沈黙は、リオンの言葉を染み込ませるだけの時間を与えた。

この『反乱軍』の構成は、大きく二つに分けられる。ピシリと姿勢を正し、真直ぐな視線をリオンに向けてくる一団は、かつて同じ人物に忠誠を捧げ、かの人を、命を賭して護り抜こうと誓い合った仲間である。一方、粗野な身なりで、その眼差しにリオンを値踏みするような色も含まれている一群は、旗揚げをするのにあたって金

で掻き集めた傭兵達である。

この企ての当初から付いてきてくれた十二人の仲間たちには、不要の演説である。だが、自分の声が彼らの心を鼓舞することも、リオンにも解っていた。ある種の象徴、それが彼に求められた役割の一つなのであった。

しかし、いつしか仲間たちの中に宿り始めた、その明らかな崇拜の色。それは時々、リオンに苦い思いをさせる。

リオンの目指しているものに対しての憧れならば良い。だが、彼個人対して抱かれたものであるならば、これからやろうとしていることは、何と矛盾に満ちたものになることだろう。

無意識のうちに眉間に寄りかけた皺を後方に立つエルネストに目で指摘され、リオンは再び顔を上げ、続ける。

「そして、傭兵諸君。勝ち目の無いこの戦いに、最後まで我々に付いて来いとは、決して言えない。だが、自由を愛する貴殿らであれば、私の言葉に一片の共感を得てくれるものと信じている。支配、それも、恐怖による支配から解放される為のこの戦いに、抗う術を持たぬ弱き人々に代わって、どうか、その力を貸して欲しい」

そしてリオンは一步下がり、深々と腰を折った。通常、身分の高い者に対してなされるその最敬礼に、これまで金持ち連中には捨て駒同然に雇われることが殆どだった傭兵たちはどよめきを走らせる。興奮は徐々に伝播していき、其処此処から「俺に任せろ」や「あんたに付いて行くぜ」などと声が上がり始める。

傭兵には、確かに自由がある。が、他人に敬われる身分というものはない。たとえどんなに腕が立とうとも、軍人を見るような眼で見られることは無いのだ。人から敬意を向けられることが無いからこそ、強い矜持を持つ。

他者によって示された敬意に浮かれるのも、無理は無いことだった。

「明日からは厳しい日々が続く。今夜は、皆、ゆっくり休んでくれ」ざわめく男たちをグルリと見渡し、リオンは壇上を下りた。擦れ

違いざまに肩を叩いてくる彼らに頷き返しながら、その場を立ち去る。

自分のテントに向かうリオンの隣に、足音も無くエルネストが並んだ。

「見事な演説でした」

自らの右腕よりも信頼でき、また有能でもある男をチラリと横目で見て、リオンは呟く。

「切に望んだものを与えられれば、人は盲目になる」

それはかつての己にも当てはまる。自嘲から、リオンの口元は笑みを刻んだ。

「しかし、皆の士気を高揚させることはできましたよ」

三十歳になる前にこの人の眉間の皺は消えなくなるだろうな、と思いつながら、エルネストは言う。

「士気……か。確かに殆どの者にはそうだったが、例外もいたようだな。傭兵の中に、随分若い少年がいたが、彼は冷静そのものだったぞ」

「少年 ああ、彼ですか。傭兵仲間では省吾と呼ばれているようですが。かなり腕が立つとの噂です」

「あの年でか？ まだ、十三、四だろう」

「はい。ここ半年ほどで、名を上げてきています」

「あんな子供が、な」

感心と傷心が半々に、リオンは呟く。皆の前に立っていない時の彼の表情は、呆れるほどに読み易い。ましてや、乳兄弟として、生まれた時から行動を共にしてきたといっても過言ではないエルネストには、その心中は、殆ど音声で聞こえるようだった。

「戦いに駆り出されなくても、どの子供も同じようなものです。子供を労働力にしなければ、王の課税は払いきれない」

エルネストは真つ直ぐ前を見詰めながら続ける。彼には、リオンがどんな表情をその眼に浮かべているのか、見なくても判った。

「だからこそ、あなたは彼と決別した。そうでしょう？」

「そうだな……」

至上の存在と思い、かつて自らの剣を捧げた人の姿が、リオンの脳裡をよぎる。それは、彼の命が尽きるその瞬間まで、決して色褪せることは無いだろう。そして、同じほどの鮮明さで彼の心を占めている『現実』も、また。

エルネストと同じく前方を見据え、リオンは深く頷いた。
「そのとおりだ」

*

何故、彼らはこんなに浮かれているんだ？

それが省吾の感想である。

興奮した男たちを鬱陶しそうに避けながら、雑魚寝とはいえ、省吾は雨露を凌げる寢床であるテントへと足を運んだ。眠気は無いが、他にすることも無い。

黙々と歩き続ける省吾のその細い両肩に、突然、重みが加わった。
「おいおい、マジでさっさと寝ようってのかい？ お前、ノリが悪すぎ」

肩に乗せられた、自分の腕の三分の太さはありそうな勁捷の腕を省吾は振り払う　その太さが、なんだか癢に障った。

「あんただって、冷めてるじゃないか」

ボソリと返す省吾に、勁捷は眼を丸くしてみせる。

「おやあ？　俺が楽しそうに見えねえって？」

「そうは言ってない」

足を止めることなく続けられるやり取りに、テントは近付き、いつしか周囲に人はいなくなっていた。

「俺らの大將は、結構人間を見てるぜ。どうやりや有頂天になるか心得てやがる。ま、あれが本心からであるってんなら、それはそれで大したもんだがな」

リオンの最敬礼を思い出し、勁捷は肩を竦める。あの物腰は、ど

う見てもかなりの身分を持った者のものだ。今回のことは、圧政に耐えかねたそこの田舎百姓が決起した、というわけではないらしい。

「戦う理由なんて、人それぞれってことだな」

傭兵は所詮ただの駒。雇い主の言うとおりに動くだけだ。今回の雇い主が何を考えて強大な敵に喧嘩を売ったのかは知らないが、取り敢えず、なかなか楽しいことになりそうなことだけは確かである。「女は現実だけで腹が膨れるようだが、男はロマンを喰わなければ生きていけねえからなあ」

そう言った勁捷の眼からそれが本気なのか冗談なのかを見極めることは、省吾には難しいことだった。むっと渋面になった少年を、勁捷は眉を持ち上げて見やる。

「まあ、ロマンだけじゃあ、やっていけねえってのも、現実の辛いところだけだよ」

そう言ってゲラゲラと笑っている勁捷には、この胸の内のモヤモヤなど決して解らないだろうと、省吾は益々仏頂面になった。目の前の男に自分と同じ頃があったとは、夢にも思っていないのである。何処も彼処もがっしりとした勁捷の身体と、ひよろひよろして不恰好な自分の身体。

何もかもを笑い飛ばす勁捷と、それらを全く面白いと思えない自分。

そして、低く轟く勁捷の声と、妙に甲高い自分の声。

傭兵たちに遠巻きにされていた頃は気に掛けたことも無かったそれらのことが、いやに気に障った。

自分でも処理しがたいその心を持て余し、省吾はどうにも落ち着かない。

クソッ、何だって言うんだ。

毒付きを、辛うじて内心のものに留めた。

一度、チラリと隣を歩く男に視線を走らせる。訳知り顔な勁捷の笑いが、無性に癪に障った。

三

宴から2日後の早朝。

リオン達は、徴収した税を貯える為の倉庫を有した砦を取り囲む森の中にいた。

「何だか、静か過ぎる」

そう呟き、リオンは目前に聳える砦を窺っていた双眼鏡を、隣に立つエルネストに渡した。それを覗いた後、エルネストも同様の感想を抱く。

当然、こちらの動きが王側に漏れていないわけが無い。リオンたちも敢えて隠そうとはしていなかった。それにも拘らず、あまり大きくないとは言え、国の守りの一端を担っているその砦を防衛しようという軍の姿が微塵も見えない。

これが畏なのか、それとも単に彼らが甘く見られているだけなのか、リオンとエルネストが決めあぐねていた時、不気味に静まり返ったその砦に、一つだけ変化が現れた。

大きな観音開きの正門が、ゆっくりと開かれる。

軍勢が放出されるのか、とリオンたちの間に緊張が走る。だが、それは現れず、一つの人影を吐き出したのみで、再び門は閉ざされた。

「あれは……」

双眼鏡を覗いていたエルネストの口から漏れた声には、信じ難いものを見た響きが込められていた。

「何だ？ エルネスト」

振り返ったりリオンに、エルネストは無言で双眼鏡を手渡す。怪訝な顔でそれを両目に当てたりリオンであったが、そこに見えたものに、やはり絶句した。

「どう見ても、子供ですよ」

呆然としたエルネストの言葉に、リオンは頷く。

栗色の巻き毛を背の半ばほどまで伸ばした、十歳前後の少女。砦から現れたのは、それ以外の何者でもなかった。

「どういうつもりだ……？」

リオンがそう呟いた、次の瞬間。

それは落雷によく似ていた。

鋭い音を立てて、彼らが隠れていた木々が次々と弾けていく。それは砲撃によるものではあり得なかった。何となれば、木々は外側からではなく、内側から破壊されていたから。

「何が……！？」

丸裸にされていく混沌と、得体の知れないものに対する恐怖とで、リオンたちからは統制というものが完全に消え失せていた。

「落ち着け、落ち着くんだ！」

声を嚙らして必死に呼びかけるリオンとエルネストだったが、砦から歩み出てきた少女のことを失念していたことを思い出す。

ほぼ同時に砦を振り返った二人は、いつの間にか肉眼でもそれと確認できるほどに近付いていた少女に目を見張る。小柄な少女の歩みからは予想しなかった速度だ。

「何事なんだ？」

右往左往する男たちを掻き分け、ようやく到着した省吾、そして勁捷が身を乗り出した。

対照的な二人の傭兵に目を走らせ、リオンは顎をしゃくる。

「どうやら、彼女の仕業らしい」

今では、その造作すら見る事ができた。

栗色の巻き毛と、痩せ過ぎではないかと思うほど、華奢な身体。

そして、何よりも彼らを惹き付けたのは、アーモンド型の大きな目の中で輝く、紅玉のような瞳。

彼らが瞠目する中で、少女の周囲の石、岩が、拳大のものから彼女の身体とそう大差ないものまで、その大きさに拘わらず浮き上がる。

「紅い目の……魔女……」

呟きは勁捷の口から漏れたものだった。

四人の注視する中、一つ、二つと浮かび上がる石や岩は数を増していき、そして、その数を数え切れなくなった時、一斉に唸りを上げて放たれた。

「やばいぞ、こつちに飛んでくる！」

それは凄まじい速度だった。

咄嗟に伏せた四人の頭上を、空気を切り裂く音を立ててそれらは飛び過ぎる。

どれほどの時間が過ぎた頃だろうか。いつしか頭上の空気を切り裂いていた音が消え、代わって呻き声が周囲を支配していた。

「おいおい、いくら何でも、あんなの相手にやできねえぜ」

伏せたままぼやいた勁捷の横で、リオンとエルネストが膝を突く。

「……こんなことができるとは……あれは本当に人間なのか……？」

呆然と呟きながら、もう数十歩しか離れていないその少女から、二人は目を逸らせることができなかった。これまで、どんな敵にも臆することなく対峙してきた彼らだったが、どうしようもない恐怖に縛られている。

そして、彼女から目を離すことができない者が、もう一人。

少年の瞳には、この時、その少女のみが映されていた。

何なのだろう、この感じは？

省吾は我知らず、右手で胸元を握り締める。心臓が、痛かった。

それは物理的な痛みと言ってもよかった。

小さな身体。細い肩。

今までに見た事が無いくらい綺麗なのに、どこか人形じみた彼女の真紅の眼差しは、目の前にあるものすら映していない。自分の起こしたこの状況も見えていないのではないか、そう思わせた。だからと言って、冷たいのではない。そんな温度さえも感じさせなかった。

何故、そんな眼をしているのか。

何故、その紅い瞳にこの身を映してくれないのか。

どうしようもなく苦しくて　切なくて。

「シヨウ！？　おい、省吾！？お前、どうしたってんだ！？」

勁捷の慌てた声に、省吾は自らの頬に伝ったものに手を触れる。そこに付いたものは透明な雫。自分がそんなものを流すとは、知らなかった。

ふらりと立ち上がった省吾の頭の中には、身を守るということなど無い。静かに佇むその少女に少しでも近寄りたくて、足が勝手に動いていた。

「ちよつと待てよ、省吾」

そう言った勁捷の声は耳に届いていたけれども、どうして止まることができようか。

一步、また一步。自分ではどうにもならない衝動に突き動かされて、省吾は進む。

が、その時。

「ば、化け物……！」

引き攣った叫び声は背後からだった。

それが引き金となったのか、辛うじて軽傷で済んでいた傭兵たちが構えた銃口が、まるで連動しているかのように次々と火を噴き始める。混乱を極めた彼らの目には、その火線上にいる省吾の姿は映っていない。

「省吾！」

飛び付いた勁捷に引き摺り倒された省吾の上を、間一髪で銃弾が飛び去る。

「あの子は……！？」

あの少女は無事なのか。

己の身などよりも、そのことだけが省吾の頭の中を占める。

覆い被さった勁捷を跳ね除け、省吾は上半身を起こし、そこで固まった。同じように、銃火を放った傭兵たちも、省吾に押し退けられた勁捷も、立ち竦んだままのリオンとエルネストも、その場にいる誰もが身動き一つできなかった。

「こいつぁ……」

息を呑んだ勁捷は、その先を続けることができない。

眼を奪う、その光景。

撃ち出された銃弾は、全て、少女に触れることなく宙に浮かんで静止していた。

上空に手を翳せば、それらを吊っている糸に触れることができるのではないか　誰もがそう思っただけだった。しかし、実際には真っ青な空には影一つ無く、そんな糸など存在していない。

見事なまでに静止していた数百発の弾丸は、少女の腕の一振りですばやく地面に落ちる。

更に、彼女の手は奇妙な動きを見せた。

何かを握り潰すような、動き。

一拍遅れて、再び背後から悲鳴が上がった。

自分たちの手の中で見る見るうちに形を変えていく火器を、傭兵たちは意味の取れないことを叫びながら放り投げる。かつては彼らの自信を揺ぎ無いものとしてくれたそれらは、今この時は恐怖の対象でしかなかった。

手の中から離れても形を変えることを止めないその鉄屑から、男たちは尻を地面に付けたまま後退る。股間が濡れていないだけましだった。

完全に戦意を喪失した彼らを少女は一瞥し、背を向ける。あまりに無造作なその動きに、圧倒的な勝利に勝ち誇る様子も、情けなくも腰を抜かした男たちに対する嘲笑も、無かった。

そして、背後に残した者たちに対する、一片の警戒も無い。

しかし、何事も無かったように歩み去っていくその背中を見送る男たちには、彼女が背を向けたからといって反撃しようというほどの気力も、戦力も残ってはいなかった。

「私たちは、あれを相手にしなければならぬのか……？」

絶望とも呼べる色を含んだ掠れた声で、弾丸が充分に装填されたままの銃を片手にぶら下げたままのリオンが呟く。それに返答でき

るほど余裕のある者は、その場にはいなかった。一枚岩のような理性を自負していたエルネストでさえも、あまりの衝撃にただ立ち竦むだけだったのである。

*

任務は終了した。

任務が終了したら、帰る。

彼女は歩きながら考える　いや、彼女は『考えた』事など無い。彼女の行動は、全て、『誰か』によつて考えられたこと。彼女は、ただ、それを実行するだけ。

帰還した彼女を、三十歳前後の男が出迎えた。

「お帰り」

真紅の瞳が、そちらへと向けられる。

「ただいまもどりました、キーツ大佐」

彼女は無感動に、声を掛けてきた男に返す。

彼はキーツ・アンドロフ大佐だ。彼女を『助けて』くれた人。だから、彼女は彼の言うことを聞かなければならない。

「お手柄だね。私も鼻が高いよ、イチ」

陽気なキーツの声を、彼女は耳に流し込む。それは脳に留まることなく、入ったのと逆の耳へと抜けていく。

『イチ』は彼女の名前。この特異な能力を持つ者は彼女一人しかないから。そして、彼女は遺伝子的にニッポンの系統が強いらしいから付けられた、名前。

記号同然のその名前に、彼女は何の違和感も覚えない。何と呼ばれようと、そんなことは彼女には何の意味も無いこと。ただ、それが自分を指しているということさえ理解していればいい。

「ありがとうございます。わたしもうれしいです」

そう返し、イチは先に立って歩き出したキーツの後に続いた。キーツは少女の反応の薄さを気にする様子も無く、得意満面で続ける。

「今回、お前の力を見せ付けたことで、彼らは出鼻を挫かれたことだろう。だが、これで引き下がるとは思えない。まだまだ気は許せないぞ」

滔々と続くキーツの言葉は、イチの頭をただ素通りしていく。彼の声が止まったのは、その足が止まるのと同様だった。

「さあ、お前の部屋はここだ。夕飯は後で運ばせるから、それまでは次の襲撃に備えてゆっくり休んでくれ」

「はい」

キーツに促され、イチは彼女にあてがわれた部屋に入る。飾り気の無い部屋に置かれたただ一つの家具であるベッドに上がると、仰向けになって両手を組んだ。あの力を使うと、いつも強い眠気に襲われる。

うとうとしながら、イチは先ほどのことを思い返していた。

前と同じように、一方的な戦い。

彼女が力を使うと、みんな同じような顔をして同じ言葉を叫ぶ。

『化け物』と。

そして、少しでも彼女から離れようと這いずり始めるのだ。

どんなに屈強な男でも、イチが相手では獅子を前にした鼠のようなものだった。逃げることにすらまならない。

彼らがイチに投げつけることができるのは、ただ『怖い』という感情だけ。

それはドロドロとまとわり付く、冷たい粘液のようなもの。振り払おうとして彼女が力を振るうほど、彼らから溢れるその感情は増えていく。

直にイチは、自分が手足のように簡単に使える力が、他の人たちには許容し難いものなのだということを理解した。

しかし、理解しただけである。

そのことに対して何かを感じるということは、無かった。

イチにとって、自分の力が他の人には無いということは何の意味もなかった。

ただ、この力があるから自分は生かされている、そのことだけは
何となく解っていた。

しかし、それでは、生きるということはどういうことなのか。
生きるというのは、息をして、動くことができるということ。

イチにはそれしか解らない。

人は死ぬのを怖がる。

死ぬというのは、生きることが終わってしまうということ。

イチには、何故それが怖いことなのかは解らない。

しかし、イチを前にした男たちが彼女を恐れるのは、死ぬことを
恐れるからだ。

本格的な眠りに落ちる直前、イチは小さなことを思い出す。

ああ、そう言えば、今日の相手にはいつもと違う顔をした人が居
たな、と。

誰もが自分から遠ざかろうとするのに、あの人だけは近寄ろうと
していたな、と。

その目は、臆することなく、自分を真っ直ぐに見つめていた。

あんなふうな眼差しを向けられたのは、初めてだった。

もしかしたら、あの人は自分に触ろうとすらしていたのかもしれ
ない。キーツも触れようとしないうちに。

そう思うと、イチは不思議な気持ちになった。

何でだろう……？

四

「次の襲撃に向けて、ゆっくり休んでくれ」

そう言つて、キーツはイチの肩に手を伸ばしかけた。しかし、いつものようにそれは少女の細い肩に届くことなく途中で止まる。この少女を拾つて以来、彼女に触れたことはない。

キーツ自身、何故彼女に触れることができないのかよく解らなかった。

自分で拾つたものを、恐れているのだろうか。

この身の奥底にある、隠しておきたい全ての事を暴かれてしまうことを……？

キーツの中のお馴染みの戸惑いをよそに、イチはこれまたいつもどおりに短い返事で彼の言葉に従つた。

視線を逸らした瞬間にキーツの存在を忘れてしまったかのように、イチは扉の中に姿を消す。ここで少女が最後に視線を合わせたたりでもしたら、また何かが変わるのかもしれない。そうは思つても、キーツには少女にそうさせる為の手段など考え付かなかった。

ほんの数秒、イチと自分を隔てる扉を見つめた後、キーツは今回の首尾を王に報告する為、通信室へと向かう。

あの少女のことでは彼が全権を任されていた。ということは、即ち、現在の軍事力の殆どが彼の手に握られていると言つてもよい。少なくとも、一個中隊ぐらいでは彼女の相手にはならないのだ。現に、彼女独りでバルディアの特殊部隊をいとも簡単に壊滅させてしまったのだから。

廊下で擦れ違ふ人々は、誰もがキーツに敬礼を向けた。五年前の下っ端兵士の身分では決して味わうことのできなかったものだ。

あの少女を見つけた時に予感したとおりのものを、今、彼は手にしていた。

裕福な暮らし。皆から払われる敬意。

そして

王直々の言葉。

これも、イチのお陰で手に入れたものの一つだ。

一際警戒厳重な扉が、王の元へ直通の通信回路のある部屋だった。ごく限られた者しか持つことのできないIDカードでのみ、それは開かれる。

足を踏み入れた室内には、キーツの他には誰もいなかった。

スクリーンを前に、キーツの指はコントロールパネルを叩く。

数秒の画面の乱れの後に、通信が繋がった。

「陛下」

画面に映し出されたその人は、冷やかな眼差しをキーツに注いでいる。どんな時でも彼のその表情が変わることはなかった。

「反乱軍の撃退は成功しました。再び公然と戦いを仕掛けてくるだけの兵力は、もう奴らには残っていないでしょう」

「あの娘の働きは素晴らしいな」

「は、確かに。今回もあまりに圧倒的でした」

「まあ、そうであろうな。バルディアの特殊部隊も歯が立たなかった者に、寄せ集めの軍隊が敵う筈がない」

薄く笑みを浮かべて王はそう言った。その笑み一つで、キーツのような小物は圧倒される。

「反乱を企てる者はもう現れないでしょう。今回のことで、イチの話は更に広まる筈です。彼女がいる限り、陛下に良からぬ考えを抱こうという者は存在しなくなることでしょう」

我が手柄のように胸を張るキーツを、王はしばし眺めてから口を開いた。

「まあ、そうかもしれんがな。取り敢えず、明日、こちらに戻れ。敵がどういう行動を取るのか、様子を見ようではないか」

「は、仰せのとおりに」

さっと腰を折ったキーツの前で、通信は一方的に打ち切られる。頭を下げたままの格好で、キーツは王の最後の言葉に何か引つ掛

かるものを感じる。まるで反乱者どもが再び何か行動を起こすことを期待しているような、そんな響きが、王の声には含まれている感じがしたのだ。

「まさか、な」

そう呟いて、キーツは顔を上げる。スクリーンに残っているのは砂嵐だけだった。

*

通信を切り、王は深く椅子に身を任せ、目を閉じた。

リオン・a・レーヴ。

滑稽なほど真っ直ぐな男。

国内でも屈指の家柄に生まれ、小奇麗な都だけを見て育った、こども。そのこどもが、ある日突然現実を見せられ、何かに目覚めた。かつて王の側近くに仕え、この身を護る為なら命すら惜しまなかったあの男が彼の下を離れてから、すでに一年程が過ぎた。

「あなたのやり方は間違っています」

去り際の言葉は、確かこうだった。

「何を仕出かすのかと思えば……」

王は呟き、薄く微笑む。

彼の記憶するリオン・a・レーヴのままであるならば、この程度の敗北では決して諦めることはないだろう。必ず、もう一度彼の前に立つことがある筈だ。

離反したあの男を、王は疎んじてはいない。いや、むしろ、好意を抱いていると言ってもよいかもしれない。

「それとも、多少は成長したのかな、お前は」

遠く離れた地で己の無力さに打ちひしがれているであろう男に向けて、王は囁く。

「一人一人は、確かにお前が信じるものを持っているのかもしれない。しかし、群衆は愚かなものだよ」

青臭い、男。だが、決して不快ではない。

果たして彼は、この王の元まで辿り着けるのか。それを予想するのは、いつそ愉快ですらあった。

瞑目した王の耳に、控えめに扉を叩く音が届く。

「入れ」

王の声に応じて姿を現した侍従は、隣国ザヤルツクからの使者が謁見を求めていることを告げる。用件は、聞かずとも判った。

ザヤルツクは、この秋も不作だった。そして、ザヤルツクの隣国で他国に援助ができるほどの蓄えがあるのは、ここグレイステンだけである。

「また、か。我が国の蓄えは、我が民の為のものなのだがな」

穏やかな声でゆっくりと身を起こした王に、侍従は深々と頭を下げた。

前回のザヤルツクからの使者の訪問から、まだ三ヶ月ほどしか過ぎていない。王の口から物憂げな息が小さく漏れたのを、侍従は確かに聞き取った。

*

キャンプは惨憺たるものだった。逸早く少女の攻撃に気付いた四人を除いて、無傷な者はいないと言ってよい。だが、それにもまして無残なものは、土気の衰えである。五十名ほどいた傭兵たちの実に四分の三は逃亡、また、リオンに命を預けると誓った者も、流石に逃亡した者はいないとはいえ、戦いに出られるほど傷の軽い者は十二名中皆無だった。

「随分人が減っちまったもんだな」

明かりと獣除けを兼ねて燃やされている篝火をぼんやりと眺めていた省吾の隣に、酒瓶を持った勁捷が腰を下ろす。省吾はチラリと視線を走らせたが、すぐにまた炎へと目を戻した。

全く変わらぬ少年の様子に、勁捷は訊ねようとしたことを再び吞

み込んでしまう。

「何だ？」

酸欠の金魚よろしく口をパクパクさせるむさ苦しい男に、省吾は視線をそのままに問う。

まさか省吾の方から会話を促してこようとは思わず、勁捷は気まぐすうに二、三度咳払いをしてからようやく喉に引っ掛かっていたものを吐き出した。

「お前、何だつて『あの時』泣いたりしたんだ？ ブルツちまったわけでもないようだしな」

問われた省吾は炎から目を離さない。返答までに時間を要したのは、考えていた為なのだろう。しかし、その返事はいささか拍子抜けするものだった。

「……判らない」

「判らんつて、お前……」

お粗末な返事に、勁捷は省吾に振り向く。だが、その答えを選んだ本人が、誰よりも途方に暮れているようだった。

「判らない。ただ」 省吾は胸元を掴み「ここが、苦しくなったんだ。あの子を見た時」

炎を見つめたままのその横顔は頼り無さそうであり、また、不思議と大人びているようでもあった。

勁捷は思わず頭を抱えなくなる。

もしかして、これは、誰もが一度はかかるといふ、あれか……

……？

「よりにもよつて、あんな厄介なのを……」

「どういう意味だ？」

「ああ、いや、お前も一つ大人になったのねつてことだよ」

一人で納得している勁捷に、省吾は納得がいかない。不満を顔中に表していた。

「まあまあ。それより、お前これからどうするんだ？」

答えは予想できたが、一応勁捷はそう訊いてみる。

「あの子に、もう一度会う」

「やっぱり、そうくるか。だが、会わせてくれ、で会える相手じゃねえぞ？」

「リオンと行く」

「それは名案かもね」

勁捷は、駄目だこりゃ、と言わんばかりにグルリと目を回す。

確かに俺も初めての時はのぼせたもんだがな、と勁捷はかれこれ二十年ほど前を思い返して溜め息を吐く。もつとも、彼の場合は省吾より少なくとも五年は早かったが。

「しょうがねえな、俺も行ってやるよ」

「別に頼んでない」

「いいじゃねえか、俺が行きてえんだよ」

省吾の背中を手の平で三回叩き、勁捷は持っていた酒瓶をぐいと差し出す。省吾は少々むせながら片眉をひそめ、それでも酒瓶を受け取った。

「呑んだら大將んとこへ行こうぜ。どうせなら貰うもんは貰った方がいいからな」

大雑把なわりに妙にせこい勁捷の言い分に、省吾は、呆れたような感心したような何とも複雑な顔をする。珍しく見せた仏頂面以外のその顔を、勁捷が面白そうに横目で見た。

「なあ、シヨウ。食う、寝る以外のことがあるってのも、いいもんだろ？」

ニヤニヤと、満面に浮かべた勁捷の笑い。一人で何でも解っているようなそれに、省吾はいささか居心地の悪い思いをする。この広い世界に飛び込んで以来初めて、自分がこの上なく無知なような気にさせられた。

五

リオンとエルネストは、王国の地図を前に額を突き合わせていた。改革がそれほど容易にできるものであるとは、彼らとて思っていない。しかし、今日の戦いはあまりに一方的過ぎた。

兵力は激減し、組織立った進攻は到底望めそうもない。

「予定変更ですね」

渋い顔でエルネストが確認する。

元々今回の砦攻略は王側の戦力を削ぐことがその第一目標ではなかった。何よりの目的は、税として集められた食料を近隣の民へ放出することで、食えることだけで精一杯な現在の生活を改善し、リオンたちの声を聴くだけの余裕を作ることであった。重い課税で気力も何も根こそぎ搾取されている現況では、改革を説いたところで耳を貸すところではない。

「傭兵たちのうち、軽傷だった者は大多数が逃亡、残ったのは傷が重く動けなかった者が殆ど、か」

「ええ、それに我が同志たちも重傷の者ばかりです　幸い、いずれにも死者は出ていないようですが」

「そうか」

リオンの眉間に刻まれた皺は一層深く、エルネストは指で均してやりたくなる衝動に駆られる。

「取り敢えず、動ける者の数を把握しなければならないな」

そう言って立ち上がったリオンの背中を見送ってから、エルネストはもう一度地図を見つめた。ほぼ中央に、一際大きく描かれた首都、セントがある。

「ッ、とそれを指でなぞって、エルネストはひとりごちる。

ここに、リオンがかつて最も敬愛した人物が居る。

エルネストは直接拝顔したことはなかったが、乳兄弟として物心付く以前から常に行動を共にしていた彼には、リオンがどれほどあ

の王のことを崇拝していたかはよく知っている。

王の側近くに仕える近衛隊の一員となつてからは、彼の為に自分は強くなるのだと、目を輝かせて従者であるエルネストに意気込んでいたものだった。

リオンの行動は、何もかも、王の為だった。

ふ、とエルネストが苦笑する。

「違う、な」

エルネストは顔を伏せ、全てを過去形で考えている自分を、否定した。

リオンは未だに、王に対する忠誠を忘れてはいない。

未だ、リオンにとつては過ぎ去つたことではないのだ。だからこそ、彼は王に対して無謀な戦いを挑もうとしている。武人として、決して愚かではないリオンに、この戦いが無謀すぎる事が判らぬ筈がない。それでも挑み続けるということは、つまり、そういうことなのだ。

勝ち目の全く無い戦いを始めた真の理由。

リオンが心の内をエルネストに打ち明けてきた訳ではない。

しかし、兄弟同然に育つてきた彼には、リオンの心の動きが見える。民草の窮状を王に訴え、その改善を乞う。

言葉では、それは届かなかった。

だが、王の目の前で首を斬り落として見せても、かの人の心は動くまい。

確かに、重税に喘ぐ民を思いやる気持ちは大きい。それだけではなく、さらに先を見れば、このままの圧政ではいずれ不満が爆発し

最悪の形で反旗を翻らせる事になり兼ねない。

民の苦しみを思い、同時に王の行く末を憂える。

貴族として庇護すべき者達への哀れみも、騎士としての忠誠も、どちらも本物だ。更には、今は支配されるだけの者達にも何かを決定する、某かの権利はある筈だという信念と。

リオンの中にあるのは、『正しい』事ばかりだ。

主人ほど真つ直ぐなままではいらなかったエルネストには、王の施政、考えが全て間違っているとは思えない。

リオンが考えているほど、人は輝かしく素晴らしいものではないのだ。

大多数の人間は、弱く愚かなもの。自ら考え行動するよりも、支配され、誰かが行く先を指示してくれることの方を好む者は、多い。現に、かつては同等であった筈の同志たちでさえ、次第にリオンを『指導者』として一段上のものとしてみるようになっていき、今では完全に優劣が分かれてしまっているのだから。

本当は、リオンの掲げる『身分の優劣などなく、皆が等しく自分の考えで生きていける世界』など、夢のまた夢であることは百も承知だ。

「だからと言って、あなたを切り捨てることはできませんよねえ、リオン様」

溜め息を吐き、地図をたたむ。

テントの中の灯火を消し、エルネストはリオンの後を追った。

*

省吾と勁捷は、珍しく一人で歩いてくるリオンの姿を認め、立ち上がった。

「よお、大将。これからどうするんだい？」

片手を上げた勁捷に気付き、リオンが歩み寄る。

「あなた方は、確か……勁捷殿と、省吾殿だったな」
名前を呼ばれ、二人はやや驚き顔をする。

「これはこれは……名前を覚えてくれていたのか」

意外そうな顔をされ、リオンはややむっとしたように口を曲げた。
「私は、命を預けてくれたあなた方の名前を覚えぬような礼儀知らずではない」

そう答えたリオンだったが、以前同様の受け答えがあつたことが

脳裡をよぎり、眉間に皺を刻む。

『私の名を覚えて下さったのですか!』

『そなたは余の為に生き、余の為に死ぬ者であろう? 名を知るのは当然のことだ』

それは、近衛隊に選ばれたばかりの、未だ幼かった頃のこと。

頭を一振りしたりオンに、勁捷が怪訝な顔をする。表情には出ていなかったが、省吾の心境もあまり大差は無かっただろう。

「リオン様、眉間」

追い付いたエルネストが、見えた筈がないというのに、背後から指摘する。

「おや、あなたたちはあの時、隣に居ましたね」

「ああ、お互い無事で何よりだな」

何やら妙に意気投合したらしいエルネストと勁捷は、どちらからとも無く握手を交わす。

「それで、あなた達はこれからどうするのですか?」

「俺は、あんた達と行く」

ボソリとそう答えたのは、省吾である。

「あれほどの力を見せ付けられたというのに、まだ私たちと来て頂けるといふのか?」

望んではいても期待はしていなかったリオンは、願っても無い申し出に身を乗り出す。

「第一、金はもう……」

貰っている、とりオンのあまりの喜びようにやや怯みつつ続けようとした省吾だったが、逸早く勁捷に遮られた。

「ああ。ただ、ちょっとばかり危険手当を足して貰えると、こつちももつと張り切れるんだがな」

「危険手当……? まあ、構わんが、金銭で釣り合う程度の危険とは思えんぞ」

呆れ顔のリオンに、勁捷はヘラヘラと笑って親指で省吾を指差した。

「ま、俺はともかく、こいつには別の理由もあるからな」

「別の理由、とは？」

「女だよ」

リオンとエルネストは、勁捷の言葉に一瞬耳を疑った。

「は？」

まじまじと二人に視線を注がれて、省吾は勁捷を睨み付ける。

「いい加減なことを言うな」

「いいじゃねえか。本当のことだろう？」

片目を閉じてそう返した勁捷に、省吾は言葉に詰まった。どうも、この上なく大きな弱みを握られたような嫌な予感がした。

「とにかく、どんな理由にしろ、同行してもらえるなら心強い」

殆ど二人の間に割って入るように、リオンが言う。次いでエルネストも執り成すように付け足した。

「そうですね。恐らく、他の人々は当分動けないでしょうから」

そう言う、リオンとエルネストは他の人々の様子を見るから、とそそくさと二人の傍から歩み去る。

取り残された省吾は、勁捷を振り返ることなく自分のテントへと踵を返した。

勁捷はこの上ない仏頂面のままかなりの早足で歩く省吾を追いかける。

「おいおい、そんなに怒るこたあねえだろう？」

肩を怒らせたその背中に向けて掛けられた呑気なその声に、省吾の足がぴたりと止まる。

「何だって、あんたはそんなに俺に構うんだ！？」

そう言った彼の声は、激昂したが為にいつもより高くなっていた。

「理由を訊かれてもなあ」

「俺は、馬鹿にされるのは嫌いだ」

こんな時でなければ、迷わず殴り飛ばしているだろう。現に、省

吾の骨張った拳は固く握られている。

「別にかからかつちやいねえよ」

誤魔化そうというのか、と眉を逆立てて振り返った省吾は、そこに真面目な光を宿した眼差しがあることに面食らう。

「お前はあの子に会うんだろ？ それは本当のことじゃねえのか？」
いつもの茶化してばかりの勁捷とは全く違うその声音に、省吾は飛び出しかけていた罵声を呑み込んだ。

「どうだ？」

促され、省吾は唇を噛んで俯く。

あの子のことを想うと、胸が苦しくなる。逢いたくて、仕方が無くなる。今こうしているのももどかしい。あのキレイな紅い目を覗き込んで、その目で自分を見て欲しい。

そんな気持ちになる理由など、今はどうでも良かった。

「どうしようもないんだ。自分でも、どうにもならない」

足元に転がる石を親の敵のごとくに睨みつけている省吾を、勁捷は羨むような呆れるような、不思議な色を浮かべた眼差しで見る。

「まあ、しょうがねえ、こればかりはよ」

ポンポンポン、と叩かれた背中からは、いつもの力任せのものとは違っていた。

六

首都までの長い行程が可能な者は他には居らず、結局、リオン、エルネスト、省吾、勁捷の四人だけでの出立となった。正確なところを言えば、首都までどこるか、自分の下の世話さえまならない者も少なくなり、多少なりとも動ける者は彼らの看病の為に残さなければならなかったのだ。

「けどな、大将。たった四人だけで何をやろうってんだ？ しかも、こんな辺鄙な所で」

辺鄙などという言葉では生温すぎる、獣道すらない山中を進みながら、勁捷がリオンにそうばやく。今歩いているところは王の居る首都とは遥か遠く離れた山奥だった。

「うむ、もしかしたら、人数を増やせるかもしれないのだ」

茂みを山刀で削いでいるエルネストの後を追うリオンは、足元から目を離さぬままそう答えた。

「人数を増やすだと？ こんな山奥でか？」

「ああ。噂では、この山には王の圧制から逃れた人々が隠れ住んでいるらしい」

「そんな奴らがいるのか？ だったら、初めから俺たち傭兵なんぞ雇わずに、そっちに声を掛けてみればよかったんじゃないの？」

「噂だといったであらう。王もご存知……知っていた筈だが放置していたし、信憑性はないのかと思っていた」

「そりゃ、放っておくだろうよ。こんなとこまで兵を派遣して逃亡者を罰しても、時間と金の無駄なだけだぜ」

「まあ、そうかも知れんな」

リオン自身いささかうんざりした面持ちで、そう答えた。

この困難極まる山登りを始めて三日にもなろうというのに、未だ人影をチラリとすら見ない。動くものといえば、どれもが毛皮が羽毛を被っている。

「本当にこんなところに人間が住んでいるのかねえ」

溜め息を吐いて立ち止まった勁捷の尻を、省吾の足が蹴り飛ばした。

「止まるな」

「わかったよ……」

一際大きな溜め息を残し、勁捷は再び足を運ぶ。

暫らく無駄足ではないのか、せめて酒が呑みたいなどと足と同じくらい口を動かしていた勁捷であったが、突然、その両方を止める。「止まるなって言っただろ！」

足元に気を取られていた省吾は、筋肉で固められた勁捷の背中に頭突きをする羽目になり、抗議の声を上げる。それを片手で制し、勁捷はいつに無く鋭い眼差しで前方を透かすように見つめていた。

一拍後、勁捷は強い声を前方に投げる。

「エルネスト、止まれ！」

言われた当人は『え？』というふうには振り返ったが、その手は止まらなかった。エルネストの手にした山刀が行く手を塞いだ茂みを薙ぐと同時に足元がぐら付き、一瞬後、四人は残らず宙にぶら下がった網の中へと捕らわれていた。

「また、古典的な……」

なんとも無様な格好で、勁捷は憮然として呟く。彼以外の三人は、よく状況を呑み込めてはいないようだった。

ナイフを取り出そうとしても、さして大きくない網の中にぎゅうぎゅう詰めの宙吊り状態では、ちよつとした動きもままならない。

「早いとこ見回りが来てくれることを祈るしかないな」

自力で抜け出すことを諦めて、勁捷は肩を竦める。

「すみません、私が早く気付いていれば良かったのですが」

「まあ、噂が本当だってことが、これで判ったじゃねえの」

心底申し訳無さそうに言うエルネストへ、勁捷は全く深刻な様子を見せずに返した。

「これが彼らの仕掛けた罠だと言うのか？」

「他にいないんじゃないの？」

緊迫感の無い勁捷に、苛々と省吾が割り込んだ。

「そんなことより、これから抜け出すのが先じゃないのか？」

「助けてくれて、叫んでみるか？」

これ以上格好悪くなりようが無いし、といつもどおりにへらへらと勁捷が言った、その時、エルネストが安堵の声を上げる。

「人です」

彼の言葉どおり、コソリとも足音を立てずに、三人の男が間拔けな四人を見上げていた。

*

後ろ手に縛り上げられ数珠繋ぎとなった四人が到着したのは、下は赤子、上は四十歳ほどまでの男女で構成されている、人口五、六十人ほどの小さな村だった。

「こんな山奥に、よくこれだけの村を作ったもんだな」

感心したように、勁捷が省吾に囁いた。省吾は頷き、辺りを見回す。

あれだけ鬱蒼としていた森が突然消え、二十戸ほどの家、そしてかなり大きな畑も見えた。

「この長と話がしたい。どちらにおられるか？」

立ち上がってそう問いかけたリオンに、周囲を取り囲んでいた人垣が、ビクリと半歩下がる。いかにも戦いを生業としているような省吾や勁捷の姿が、不安を覚えさせているのかもしれない。

リオンの声に反応したのか、人垣が割れ、そこから、この村では恐らく最年長であろう五十歳ほどの男が現れた。

白くなったものが混じる焦げ茶の髪を首の後ろで束ねたその男は、数呼吸分ほど、四人を眺める。波の立たない水面のような眼差しが、リオン、エルネスト、勁捷、そして省吾の順に向けられた。

「彼らの縄を解いてやれ」

男の言葉に、周囲がざわめく。

「でも……」

「大丈夫だ」

よほどこの男は信頼を置かれているのだろう。男が力強く頷くと、不安げながらも数名の男たちがリオンたちの縄を解くべく、ナイフを片手に歩み寄った。

「こちらへ」

短い言葉で四人を促すと、男は先に立って一軒の家へ入って行った。

リオンとエルネストはすぐにその後を追い、省吾と勁捷はやや遅れてその後に行く。

最後に部屋に入った勁捷が扉を閉めると同時に、男が椅子を示した。唐突な訪問者にも戸惑う様子もなく、落ち着いた物腰である。

「どうぞ、座ってください」

各々の尻が落ち着いたのを見て、男も腰を下ろす。

「私はロイ・ブラウンです。あなた方は？」

「失礼した。私はリオン・a・レーヴ、これはエルネスト・アッシエンバッハ。そして、そちらは」

「省吾」

「と、李勁捷だ」

一通りの自己紹介が済むと、ロイがリオンに視線を戻した。

「それで、何の為にこんな山奥まで？ この村に住みたいというわけでは無さそうだが」

「率直に申し上げる。今現在の王の治世を改善すべく、私たちに力を貸して頂きたい」

それだけ言って、リオンは全ての説明が終わったとばかりにロイの返事を待つ。

だが、それで事情が通じるわけもなく、ロイはやや困ったように、エルネストに目を移す。ロイの当惑は至極当然であり、あまりに簡潔すぎるリオンに内心額を押さえながら、エルネストが言葉を足し

た。

「それはあまりに率直過ぎます、リオン様。ロイ殿、我々は王の施政を正す為、決起しました。しかし、手が足りません。あなた方は王の圧制から逃れる為、この地まで流れてきたのでしょうか？　でししたら、他の人々を救う為に我々に力を貸して頂けないでしょうか」
ロイは口を閉じたエルネストを見つめ、手元に視線を落とし、再びリオンに顔を向ける。

沈黙は短かった。

「我々は、いや　私は、あなたたちの力にはなれない」

「何故！？　王があつた圧制を止めれば、あなた方は国に帰ることができる。こんな不便なところでの暮らしから脱することができるといふのに！」

気色ばんだリオンの言葉を、ロイは薄い笑みでかわす。

「ここでの生活は、あなたが思うほど大変なものではない」

「しかし、それでは、王の下で暮す他の人々のことはどうでもいいと言われるのか？」

「リオン様」

思わず立ち上がったリオンを、エルネストの声が引き戻した。

「……失礼した」

ボソリと謝罪を口にしたリオンが腰を下ろすのを待って、ロイは口を開く。

「あなたはかなり身分の高い方のような。そして、若い」

話の筋が解らず怪訝な顔をしたリオンに、ロイは微笑んだ。

「私は、『王の圧制から逃れた』訳ではない。ただ、ある時の税が払えなかったから、国を離れたのだ」

「どういう意味ですか？」

そう問い返したりオンの横で、エルネストが膝の上に置いた自分の手に視線を落とす。

ロイは続けた。

「税が払えなければ、子供が殺される。それが現在のあの国の法だ。

親を殺しては尚更税が徴収できなくなるが、子供を殺す分には食いつ持が減り、その分税に回せるようになるから、な。だから、私は逃げた」

「そんな政策が間違っているとは思われないのか？」

「思いません」

ロイの即答に、リオンは意表を突かれる。何か反論しようと大きく口を開き、結局何も言えずにまた閉じたりリオンは、エルネストがチラリと自分に視線を走らせたことには気付かなかった。

「リオン殿、あなたは西の隣国、バルディアのことをご存知か？ あそこは自由な風を誇りにしているが、国内では犯罪が横行し、暗くなつてからは外を歩くこともできない。北のザヤルツクでは、税は軽い。だが、少しでも気候が狂えばすぐに飢饉となり、この国に援助を求めてくる。他の国も、似たようなものだ。治安の悪さ、飢饉、災害、病、色々なものに絶えず悩まされている」

「しかし……」

「確かに、今の王の治世では普段の暮らしは苦しい。だが、その分、犯罪は稀で、大雨の度に右往左往することもない。そして 病気になるれば、国立の病院で安く、優れた治療を受けることができる。この国は近隣の国に比べても、決して小さいわけではない。多くの民を治めるのに、王は最も適切な方法を取っているとは、思わないか？」

同意を求める言葉と共に、ロイは静かな視線をリオンに向けた。

「ただ、私は、『その時』子供を死なせなくなかったから、今、ここに居るのだ」

リオンは反論の為の言葉を失う。膝を握り締めた彼に代わり、エルネストが口を開く。

「それでも、私たちは王に弓を引こうと思います。より良い国を創る為に」

真つ直ぐなエルネストの眼差しを受けて、ロイは瞬きを一つする。
「あなたは……」

ロイの口を封じるように、エルネストは小さく首を振る。

「……そうか」

ロイはゆっくり目を閉じ、開いた。

「私は、力になれない。しかし、村の者に話はしよう。中には協力したいと言う者もいるかもしれない」

そう言うと、ロイは立ち上がった。

「今夜はこの村で休んでいくといい。何なら、この村に住んでも構わない」

「いや、それはできない。私には、私を信じて待っている者たちがいる。しかし、宿は有難くお借りする。かたじけない」

深く頭を下げたりオンを、ロイはじっと見つめる。

「あなたは、真っ直ぐすぎる」

ロイの呟きはリオンに充分届かなかった。

「え？」

何と言ったのか訊き返そうと頭を上げたりオンに、ロイは微笑みだけを返した。

七

省吾は闇の中で数回瞬きをした。妙に落ち着いた空気が逆に落ちて着かない。

周囲を窺わずに休むことができるのは、随分久し振りだった

あの老傭兵の下に居た頃以来かもしれない。

隣の寝台の勁捷は、もうすっかり夢の中の住人と化しているようだった。省吾は寝台から下り、部屋を出る。

すっかり夜も更け、静まり返っている家々の間を歩き、広場へ出た。月の無い夜空を見上げると、高度がある為か、いつもより星が大きく見える。

あの子も、この星を見ているのだろうか。

ぼんやりとそんなことを考える。そのせいか、背後に近付いていた人物に気が付くのに遅れた。

「眠れないのかね」

突然届いたその声にビクリとし、咄嗟に腰に差していた銃を向けてしまう。

「驚かしてすまなかった」

穏やかな調子で、ロイが言う。銃口が真っ直ぐに狙っているというのに、怯んだ様子は全く無い。

「あんたたちは足音を立てないんだな」

「そうかな」

「気配もしない」

「獣たちを相手にすることが多いからかもしれん」

気まずそうに銃をしまう省吾を、ロイは何処と無く物悲しい目で見つめる。

「少し話をしないかね」

そう言って、ロイは近くのベンチを指差した。

ロイが座り、暫し躊躇った後、省吾はその隣に日と一人分の間を

空けて腰を下ろす。

「君は幾つだね？」

「知らない」

即答して、省吾は言い直す。

「……多分、十三か十四ぐらい」

「そうか……私の息子も同じくらいになっている筈だったな」

「だったって……ここに居るんだろ？」

返事が遅れた。

「連れて来たんじゃないのか？」

「ああ、いや……もう、居ないんだよ。死んでしまった」

「死んだ？ 殺されないように、逃げてきたんじゃないのか？」

怪訝な顔でそう訊いた省吾に、ロイは薄く微笑んだ。

「ここへ来て二年ほどして病気になる、逝ってしまった」

自嘲するように、小さく声を上げて嗤う。その口元に刻まれた皺を見て、ふと、省吾は目の前の男が見た目よりかなり若いのではないだろうかと感じた。心が老いてしまっているから、外見も老け込んでしまっているのではないかと、と。

省吾の視線を頬に感じているだろうが、ロイは正面を見つめたまま続ける。

「首都に居れば、もしかしたら助かっていたかもしれないがね」

「けど、その前に殺されていたかもしれないんだろ？」

仕方ないじゃないか、と続けた省吾に、ロイは小さく「そうだな」と呟いた。

短い沈黙の後、再びロイが口を開く。

「君は傭兵だと聞いたが、何故、そんな仕事を？」

その質問をされる理由が解らず、省吾は小さく首を傾げる。

「食べる為には、何かやらなくちゃならないのは当たり前だろう」

「しかし、それなら、こんな勝ち目のない戦いの為に雇われなくても良いだろうに」

「それは……」

言い淀んだ省吾に、ロイが顔を向けた。

「何か、他に理由があるんだね？」

「」

唇を結んだ省吾を、ロイは無言で促した。

「会いたい子が、いるんだ」

「会いたい、子……？」

意外そうな顔をされ、省吾は何やら居た堪れなくなり、立ち上がる。

「ああ。俺はもう寝る」

「おやすみ」

小走りに去っていく背中へ声を掛け、ロイは省吾がそうしていたように、空を見上げた。

死んだ者は夜空の星になる。

そんな迷信を思い出しながら。

*

広場に集まった男たちは、総勢二十人ほどであった。リオンの呼び掛けに、そのほぼ半数の手が挙がる。

「この戦いは、かなり分の悪いものになる。それでも、共に来て頂けるのか」

再度の確認をするリオンに、拳手した村人たちは深く頷いた。

「この村は、王の支配が無くともうまくいつている」

「そうだ、そうだ。皆で協力すれば、良くなるもんだ」

其処此处から、そんな声上がる。

「私もそう信じている」

リオンはロイを振り返った。

「あなたの考え方も、ある点では同意できる。確かに、私のやろうとしていることは奇麗事ではないのかもしれない。だが、それでも信じていたいのだ。人はお仕着せでなくとも良い国を創ることが

できるのだ、ということを」

リオンは揺らぎの無い眼差しでそう言い、別れの握手を求めて左手を差し出した。が、ロイの肩に旅支度が担がれているのを目にし、その手が止まる。怪訝な顔のリオンに、ロイが右手を差し出した。

「私も同行させてもらうことにしたよ」

「本当ですか？」

リオンよりもエルネストの方が、より大きな驚愕を示す。

「ああ。よろしく」

「あなたが共に来てくださるのならば、心強い」

差し出されたロイの右手を、リオンが固く握り締めた。

リオンが離れたところを見計らって、エルネストがロイに囁く。

「どういう心境の変化ですか？」

「いや、心境自体は変わってはいない。だが、戦う理由は人々だよ。君もそうだろう？」

「……そうですね」

エルネストは小さく頷いた。

少し離れた場所では、勁捷が省吾に何やら意味有り気な視線を向ける。

「なあ、シヨウ。お前、昨日の夜、あのおやじさんに何か言ったのか？」

「別に何も」

「へええ」

勁捷は疑わしそうにしていたが、省吾は本心からそう思っていたのである。

*

「それで、まだ信じ難いのだが、本当にそんな力を持った人間がいるのかね」

ロイが三度目の同じ台詞を口にした。

「はい。と言つても、本当にその目にするまでは信じていただけないのでしょね」

エルネストが苦笑しながらそう返す。実際のところ、彼自身、もしかしたらあれは夢、それもとびきりの悪夢だったのではないかと思う時があるのだ。

半信半疑のロイをよそに、リオンが今後の方針を告げた。あの少女のことは口でどうこう説明するよりも、実際に目にした方が手っ取り早い。

「まず、あの力を持つ者が彼女一人であることを確認する。二つの部隊に別れて同時に攻撃すれば、それを確かめられるだろう」

「分裂したらどうするよ」

茶化した勁捷の言葉に、省吾の蹴りが飛んだ。

「いてつ。解った、冗談だつて」

そんな二人は横に置いておいて、リオンが地図と見取り図を広げる。

「この砦を、次の目標にしたい。これが見取り図だ。ここここ、正反対から同時に侵入する。ロイ殿、あなた方は獣を獲るための罠を仕掛けるのが得意だと伺ったが、この通路に五ヶ所ほど仕掛けるにはどのぐらいの時間が必要か？」

問われて、ロイは軽く首を傾げる。

「そうだな……五分もあれば充分だと思うが」

「それは助かる」

「予め、我々が砦を襲撃するという情報を流しておきましょう。確実にあの少女が砦にいるようにしないと、どちらにも彼女が現れないということになりかねませんからね」

「分け方は、私とエルネストの組と、勁捷殿と省吾殿とロイ殿の組とでよろしいか？」

「私は構わないよ」

「俺もそれでいい」

リオンの言葉に、ロイ、省吾が頷く。一人注文を付けたのは、勁

捷である。

「分け方はそれで良いとして、俺らの組はちよつと早めに行動開始してもいいかい？」

「それは、また何故……」

「あのお嬢ちゃんをこつちに引き付けたいのさ」

そう言つて、勁捷は省吾に片目を瞑つてみせる。

「ああ、そうか、省吾殿は……」

「そういうこと」

「省吾の『会いたい子』というのは、もしかして……？」

ロイの言葉に、勁捷は大袈裟に首を振る。

「そうそう、よりにもよつて、あんな厄介なのなんすよ」

台詞が終わりきる前に、勁捷の背中に、今度は連続五回の蹴りが入った。

「いていていてっ、ショウッ、止めろつて」

「まあまあ、省吾。けれど本当にそれで良いのですか？こちらとしては有難いけれども、彼女の相手はそう簡単なものではないでしょう。獣用の罾も、何処まで通用するか……」

宥めるように割つて入ったエルネストに、省吾は足を止めて頷きを返した。

「ああ、そうして欲しい」

固い決意が其処には見て取れ、リオンも強く頷く。

「よし、では、省吾殿たちにはこれを渡しておこう。彼女が現れたら連絡してくれ。我々はそれを合図に行動を開始する」

そう言つて手渡されたのは、小型の無線機だった。

「決行は三日後にしよう。その間に、我々が襲撃するという情報を流しておく。首都からこの砦までは一日もあれば到着する。丁度良い頃合だろう」

少女との再会を翌日に控え、省吾は妙に冴えた頭を持て余していた。夜も更け、突撃に備えて休まなければならないということは解っているのだが、どうしても眠る気にはなれない。

ぼんやりと夜空を見上げた省吾の目に、猫の爪のような三日月が映る。触れれば皮膚を切り裂きそうな冴えた輝きが、どこかあの少女を思い出させた。

目を閉じ、面影を辿る。脳裡を占めたのは、真紅の瞳だった。

一目見ただけのその姿は、記憶から薄れていくどころか、むしろ時と共に鮮やかになっていくような気がする。

「明日には、逢える……」

口にすれば現実になるように思えて、省吾はそう呟いた。

彼女に会い、そして自分の存在を認識させることができるのなら、この命すら惜しくないとさえ思える。そんな衝動的な部分が己の中にあるとは、夢にも思っていなかった。

制御できない感情に、省吾は深く息を吐く。

そんな溜め息をこぼす省吾を陰から見守る二人の男　ロイと勁捷は、少年の心中を手取るように理解し、互いに視線を交わした。数十年昔のこととは言え、彼らもかつて経験した感情である。その後何度も他の女性に想いを寄せたこともあったが、最初の女というのは、一つ次元の違うところに存在している。その上、省吾のように自分のことだけで生きてきた者にとって、突然誰かが至上の存在になってしまうということは、まさに驚天動地の出来事に違いない。

「明日はやバイ事になりそうだな、こりゃ」

ぼやく勁捷に、ロイが苦笑を浮かべて頷く。

「確かに。私たちが手綱を取ってやらないと、何処に走り出すことやら」

「いや、鎖で縛り付けててもぶっ千切って行きかねないぜ。熱くなつた橇犬並だ。意気込みだけが空回りしちまうよ」

省吾の耳には届かないのでもいい事に、勁捷は肩を竦めて好きなこ

とを言う。ロイはそれに対して同意も否定もせず、静かに笑った。その笑いは未だに若さを残す勁捷にも向けられているように思われた。

初老の男のその笑みを見つめて、勁捷はふざけた色を消して己の疑問を口にする。

「なあ、あんた。どうして急に俺たちに付く気になったんだ？ あの夜、うちの大将に言っていたことは紛れもなく本心だった筈だ。あの兄さんは、頭は切れるが単純だから、すんなり受け入れちまつたようだが、俺はどうも合点がいかねえ」

勁捷の目の色には、疑惑が見え隠れしている。彼の右手はロイの返答次第でどうにでも動かせるように、油断無く構えられていた。

勁捷が発する張り詰められた空気に、ロイは一度は消した笑みを刻む。

思いもよらず穏やかなそれに、拍子抜けしたように、勁捷の身体から力が抜ける。

「おい、ちよつと……笑ってる場合じゃねえだろうよ。俺は、あんたがあつち側から送り込まれた奴じゃないかと疑ってるって言ってるんだぜ？」

勁捷の台詞に、ロイはより一層、笑みを深くした。

「密偵かと訊かれて、そうだと答える密偵はいないよ。君には向かない仕事だな」

そう言われて、勁捷は心中でぎくりとする。尋問することが向いていないと言われたのか、それとも、密偵という仕事に向いていないと言われたのか。

勁捷の焦りを知ってか知らずか、ロイはまだ月を見上げている省吾へと視線を移した。勁捷の立ち位置からは見て取ることはできないが、彼の目には深い悲しみと、そして、温もりとが、ない交ぜになっていた。

言葉を選びかねていた勁捷に、ロイは省吾を見つめたまま、問いへの答えを返す。

「私の息子は、人生の喜びも、苦しみさえも、知ることなく逝ってしまった。幼くして死んだ者は神の元へ行けるというが、私には神を信じることができない。神の元で息子が安らかに暮しているというふうに思うことができないのだ。未だにあの子が私の傍らにいて私のすることをじっと見ているのではないかと感じることもある」

ロイの目が、立ち上がり、自分の寢床へと向かった省吾の背中を追う。

途切れた言葉を促すことなく、勁捷は続きを待った。

「私は……省吾に何かをしてやることで、息子にしてやれなかったことを補おうとしているのかもしれないな。ただの、自己満足だよ」

自嘲が含まれたその台詞に、勁捷は無言を返しただけだった。そうではないと言ったところで、ロイが頷く筈もない。

「まあ、それがあんたの理由だってんなら、それで構わないさ。俺だって、俺だけの理由ってもんがあるしな。そんじゃ、すつきりしたところで俺は寝させてもらうよ」

片手を振って、勁捷は背を向けて歩き出した。他人の背負った十字架の重さはその人にしか判らないものであるし、何も知らない人間の言葉一つでそれが軽くなるものでもない。当人が、どうにか折り合いを付けていくしかないものだ、と、勁捷は知っていた。

一人残されたロイは、息子を看取った時からほんの少しも色褪せではない後悔を胸に抱き締めた。それで自己憐憫に浸っているだけではないかと、自らを罵ったことも数え切れない。しかし、自分の選んだ道が結局は間違いだったという明確な事実を忘れることはできなかった。省吾が見つけていた三日月を見上げて、ロイは心の中で、何度も繰り返した還らぬ者への懺悔を呟いた。

八

省吾、勁捷、ロイ以下十五名は、侵入地点を前に時計を睨み付けていた。

「五……四……三……二……一……よし、時間だ」

勁捷の声を合図に、一斉に行動を開始する。

コソリとも音を立てずに動くロイの村の男たちに、勁捷は感嘆の呻き声を上げる。

「すげえな。バルディアの特殊部隊より有能なんじゃねえの？」

整然とした男たちの動きは厳しい訓練を受けた軍隊のものにも匹敵する。勁捷は目を奪われずにはいられなかった。

それに対して、ロイは小さく笑う。

「野生の獣を相手にしていれば、いやでもこうなる。人間よりも遙かに鋭いからな 訓練項目に組み入れてみるかな？」

「え？」

「いや、別に」

素知らぬ様子で省吾の方へ行つたロイの背中を見ながら、勁捷はひとりごちる。

「食えねえじいさんだぜ」

気を入れ直して二人を追った。

人の背丈の二倍ほどの塀を越え、一同は砦内へ侵入する。罾を仕掛ける為に散つた男たちの姿は、目で確認することはできなかった。省吾たちは木立の陰に隠れ、砦内の気配に気を集中する。

仕掛けを終えた男たちが戻り始めた頃、変化は現れた。

「お、ようやくお出でなさつたようだぞ」

勁捷の囁きとほぼ同時ぐらいに、前方の扉が開かれる。

「当たり前、だな」

逆光で顔はよく見えないが、シルエットは確かに華奢な少女のものであった。

勁捷は無線機を取り出し、リオンに告げる。

「やっぱ、こっちに来たぜ」

「了解。では、こちらでも侵入を開始する。遅くとも十分後には退却するように」

「解ってますって」

勁捷はおどけた様子で無線機に向かって敬礼をし、通信を切る。

一方、そんなやり取りなど、省吾の耳には入っていなかった。

殆ど無意識のうちにふらふらと彼女に歩み寄ろうとした省吾の腕を、ロイが掴む。

「省吾、罾に気を付けるんだ」

その声にハツとしたように瞬きを一つし、省吾は頷きを返す。そして、先ほどよりはしっかりした足取りで歩き始めた。

*

「敵さんのお出ましたぞ」

そう言ってキーツが部屋の扉を開ける前に、イチにはそれが判っていた。

小さく頷いて、イチは立ち上がる。相手がどこにいるのかをキーツに教えてもらう必要は無かった。

廊下を歩くイチを、人々は露骨に避ける。万が一服の裾が掠めようものなら、青くなつて身を引くのだ。

その『感じ』は、鼠捕りに捕まった鼠や、蜘蛛の巣に引つ掛つた蝶を触った時に感じるものとよく似ていた。一つ違うのは、人間のものはあまりに強烈だから、触らなくても伝わることだ。

それは怖いということ。

死ぬことほどではないけれど、人は、イチに触れられることを怖がる。

それは、こういうふうに、手を触れなくても扉を開けられたりするかららしい。

それなのに

未だ筋肉よりも骨の方が目立つ身体の少年を前に、イチは思う。
何でこの人は、わたしに近寄ろうとするのだろぅ、と。

*

手が届く距離まで近付いて、省吾は足を止める。

何処と無く少女が怯えているふうなので、それ以上近付けなかった。

ゆっくりと腕を持ち上げ、少女の方へ伸ばす。その指先が頬に触れようとした瞬間、彼女は身を引いてしまう。

咄嗟にまた一歩踏み出しそうになり、省吾は大きく息を吐いて留まった。

「逃げるなよ。何も……傷付けたりは、しない」

優しい声なんて、どうやって出すのだろう。

そう戸惑いながらも、穏やかな話し方に努める。

「逢いたかったんだ」

掠れる声に、精一杯の想いを込める。

けれど、再び伸ばした省吾の手を、少女はやはり怯えた目でしか見てはくれなかった。

あれほどの力を持っているのに、何で俺が触ろうとするだけでこんなに怖がるんだ？

省吾は苛立たいような、悲しいような、やるせない思いになる。
絶対に、傷付けたりはしないのに。

焦る気持ちが無意識のうちに一歩を踏み出させる。その瞬間、少女は目に見えるほどビクリと震え、身を翻した。

「待って！」

殆ど何も考えずに、省吾は少女の腕を捕まえる。が、ちよつと力を加えたら呆気なく折れてしまいそうなその細さに、そして柔らかさに、咄嗟に手放してしまう。

振り返った少女は、心底驚いた顔をしていた。省吾の掴んだところを見つめ、一瞬後、走り去る。

「あ……！」

彼女を追いかけそうになった省吾を、勁捷の鋭い声が引き戻した。
「莫迦！ 省吾！ 引くぞ！」

省吾にとつては、少女に相對したのは瞬きするほどの時間にしか感じられなかったが、振り返ると、其処にはロイと勁捷しか残っていなかった。二人とも銃口を省吾の方に 正確には、その先にある扉の方に、向けていた。

一度後ろ髪を引かれるように少女の駆け込んでいった扉に目を移したが、其処から十数人の兵士たちが吐き出されてきたのを目にし、すぐに勁捷たちの方へと踵を返す。真横をロイと勁捷が放った威嚇射撃が飛びすさっていくのを感じた。

一転して荒々しい空気が支配するようになった中を走りながら、省吾は少女の腕を握った己の手を見つめる。其処に残る温もりは、生きて動くもののみが持ち得るものだった。

彼女は確かに存在しているのだと、実感した。

*

イチの心臓は、まだときどきしていた。

自分に触れようとしていた、あの手。

でも、触ったら、またあの『感じ』になつてしまふのではないか。そうしたら、この人も自分に近寄ろうとはしなくなる。

そう思ったら、地面がぐらぐらするような気がした。

これが『怖い』ということなのだ、解った。

けれど。

逃げ出した時に掴まれた、腕。

其処から伝わってきたのは、いつもとは全然違う『感じ』だった。日向だ。

まず思ったのは、それだった。ぽかぽかと温かい、日向。
イチは日向で眠るのが好きだ。あの人に触れられていれば、同じように眠れるのだろうか。
イチはあの人に触ったところを、そつと胸に抱き締めた。
その『感じ』が消えないように。」

*

事の顛末を監視していたキーツは、とてつもなくまずい状況に陥りかけていることを直感した。彼の命令には絶対服従の筈のイチは目の前の侵入者を一度も攻撃することなく、あまつさえ、自分から逃げ出したのだ。

「皆、直ちに正門へ向かえ！ 裏門の方はどうなっている？」

「は、侵入者はすでに撤退し始めています……と、ちよつと待つて下さい、これは……」

「今度は何だ？」

「いえ、あの……これを見て下さい」

気まずそうに促す部下の示すものを目にし、キーツは舌打ちをする。モニターには、四、五人ずつ捕らえて宙吊りになっている網の袋が四つ映っていた。

「正門は!？」

其処にも、ぶら下がっているものは一つ少ないとは言え、殆ど同じ光景が映し出されていた。

「これはまずいぞ……」

キーツは呻き、もう一度、少女を捕らえているモニターを見る。

上気して自分の腕を抱き締めているイチの様子は、まるきり、恋する少女のそれだった。

*

省吾たちは先に退却していたリオンたちと無事合流を果たした。彼らの姿を確認したリオンは眉間の皺を消し、ほっとした顔をする。

「遅かったな。てこずったのか」

そう問うたりオンに向かって、勁捷は首を振った。

「いんや、全然」

「それにしては……」

「いやあ、こいつが彼女との遭遇接近にのぼせ上がったよ」

危うく砦の中にまで駆け込みそうになった、と余計なことまで言う勁捷を、省吾が睨む。

息を呑み、怒鳴りつけそうになったリオンの機先を制し、エルネストが口を挟んだ。

「まあまあ、リオン様。無事戻ってきたのですから……」

「当たり前だ！ 何かあったら省吾殿は今ここにはおるまい！？」

まさに頭から湯気を立てそうな勢いで、リオンがエルネストに食って掛かる。

頭に血が昇ったりオンはその対応に慣れているエルネストに任せ、ロイが省吾に向き直った。彼の眼差しも、やはり険しいものを含んでいる。

「確かに今回は無事だったが、あのまま入ってしまったら、公開処刑まで直行だったぞ？ 戦いに身を置く者が冷静さを失ってはいかん」

常に穏やかだったこの男が見せた厳しい言葉に、己の行動が愚かなものであったことを充分承知している省吾はうな垂れる。この世界に入ってからまだ一年ほどでしかないが、これほど我を失ったのは初めてだった。いや、物心ついて以来、初めてだった。

そんな省吾の様子に、ロイはやや語調を弱める。

「いいか、省吾。どんな時でも、決して状況を見失うな。ほんの一瞬でも自分の立っている場所を忘れれば、待っているのは死だけだ。逆に、どんなに危険な状況だったとしても、落ち着いて周りを見れ

ば、必ず活路は見出せる」

ロイは口を噤んで、俯いている省吾を見つめた。その肩が、旋毛が、失ってしまった者のそれと重なる。それ以上の叱責を口にすることができず、ロイは省吾の肩を軽く叩いて締め括った。

未だいきり立ったままのリオンにてこずっているエルネストの助太刀をするべく歩み去ったロイに代わって、勁捷が口を開く。

「俺も、結構怒ってんだぜ？ 解ってつか？」

持ち前の軽さを感じさせない勁捷をチラリと見て、省吾が返す。

「……解っている」

「なら、いいさ。色恋沙汰で身を滅ぼすにや、お前はちよいと若過ぎんだよ」

肩を竦めて、勁捷がそう呟いた。そして、いつもの口調に戻る。

「で、どうだ？ 欲が出てきたらうよ？」

問われ、省吾は頷く。

もう一度会えさえすればそれでいいと思っていたことが、嘘のようだった。

もっと、あの子に触れていたい。傍にいて、不安に揺れるあの少女を脅かすもの全てから、護ってやりたい。心底そう思った。

「そんじゃ、今度はお姫様奪取作戦だな」

何処まで本気なのかわからないその言葉に、ロイの協力の元によりオンを宥め終わったエルネストが口を挟む。

「けれど、彼女の方の意思はどうなるんですか？ 強奪してみても、彼女が抵抗すればこちらは全滅ですよ」

不安の残るエルネストを、勁捷は軽くいなした。

「いや、それが、あっちの方でも満更じゃない様子なんだな、これが。あそこで最終兵器扱いされてるよか、省吾に掻っ攫われた方が遙かにましなんじゃないの？」

そこへ、まだ何か言いたそうだったリオンが、気を取り直して先のことに目を向けるべく話に参加する。

「我々としても、彼女が戦線を離脱してくれるなら願ってもない。」

確かに彼女の力は脅威だが、それより、やはりあんな少女と戦うというのは気が向かん」

「まあ、それは言えていますね。あちらの方が遥かに凄い力を持っているとはいえ、あの外見ですからねえ」

苦笑しつつエルネストが頷いた。大の大人が数十人がかりで十歳かそこらの少女を取り囲んでいるという図は、想像するだにあまり嬉しくないものである。

「ま、お子様相手にあんまりむきになりたかねえしな」

照れ隠しのように唇を歪めて、勁捷も同意した。

「すまない」

省吾は首を折るようにして頭を下げる。彼にはそれが精一杯だった。

「謝るようなことじゃねえだろ」

少年の不器用さに、勁捷が苦笑する。リオンは真面目な顔で省吾の言葉を受け止め、ロイは穏やかな微笑を浮かべるだけだった。

「ああ、それから、遅くなりましたが、私たちを出迎えたのは、ごく普通の兵士だけでした。どうやら、今のところは、他にあのような力を持つ者はいないようですね」

エルネストのその言葉で場が切り替わる。

「そいつぁ助かった」

大仰に勁捷が胸を撫で下ろした。声には出なかったが、リオンとエルネストも同様の顔を並べていた。

「まあ、取り敢えず、これで何とか方針が立てられるようになったということかな」

ロイの台詞に、一同が頷く。

確かに、これで手の打ちようが見えてきた。

九

キーツから取り敢えず部屋に行くようにと言われ、イチはそのとおりにした。

寝台に横たわって目を閉じる。

無意識のうちに両手が上がり、奇妙にざわめく胸の上に置かれた自分よりは年上の、けれどもこの皆にいる他の男たちほど大人ではない、あの人。

目を開けて、あの時掴まれたところを見る。

まだはつきりと覚えている感触に、何かが残っているのかと目を凝らしてみたが、そこには何も見つからない。

彼の手は少し汗ばんで、熱でもあるかのように熱かった。

そして、その目はイチの紅い瞳を真っ直ぐに見つめて

胸のざわめきはより一層強くなり、じっとしていることができなかった。

起き上がり、寝台から下りたイチは、窓に足を向ける。

ここは三階だけれども、イチにとってはたいした問題ではなかった。

開け放った窓から、ふわりと身を躍らせる。

その行動がキーツから言われたことに反しているということは充分解っていたが、部屋に戻っておとなしく寝ていることは、到底できそうも無かった。

そのまま正門に向かい、監視の目に付かないようにして外に出る。地面に手を触れたイチは、そこに刻まれた無数の気配からただ一人のものを選び出して、そこから繋がる糸を辿った。

ここからそう遠くないところに、その人は、居た。

会議用のテントを後にし、省吾は少し頭を冷やそうと、人気の無いところを探してうろついていた。

あの時、自分がどんなに愚かなことをしようとしていたかは、年長者に言われなくても充分に理解している。しかし、再び同じ状況になったとして、あのような行動を取らないと完全には言い切れない己がいることもまた、明確な事実だった。

周囲に誰もいないことを確認し、手近な倒木に腰を下ろした。

「冷静になれよ。でないと、あの子には逢えない……あの子を連れ出すことなんて、できないんだ」

じつくりと馬鹿な頭に言い聞かせた、その時、背後で木の葉が擦れる音がした。

獣でも寄ってきたかと、振り向きざまに銃を抜き、音のした方へと向けた省吾は、次の瞬間、信じられないものを目にし、危うく手の中の銃を取り落としそうになった。

*

あの人の気配がどんどん強くなる。

イチは時々砦の方の様子を探りながら、殆ど小走りといってもいいほどの速さで森の中を進んでいた。

今、この瞬間も、あの人が自分のことを考えているということが伝わってくる。その感じは軍の人たちが彼女に向けるようなものではなく、もっと温かくて、イチを強く引き付けるものだった。

もうすぐそこだと、と、イチは目の前の茂みをそつと掻き分ける居た。

その姿を視界に入れた途端、どきりと、胸が高鳴った。

銃口が真っ直ぐに自分に向けられているのが見えたが、そんなものよりも、その人の表情の方が余程怖かった。

彼の黒い目は、信じられないものを見たように大きく開かれている。

やはり、彼もわたしが『怖い』のだろうか。

そう思いかけたイチに、彼の想いが一気に吹き付けられた。

逢いたい、逢えた、逢えた。

それは、洪水のようにイチを包み込む。どうしたらいいのか判らなくて、まるで氷の中に閉じ込められたように身動き一つできず、呼吸することすら忘れていた。

「どうして、ここに……」

彼がそう呟くのが聞こえたけれども、イチ自身よく解らない衝動に突き動かされて来てしまったのだから、答えることなどできる筈もなかった。

押し黙ったままのイチに、彼が一步を踏み出す。

「逃げるな！」

思わず後退ったイチを、その声の中の必死な響きが射竦める。

「違う……怖がらないでくれ……傷付けたりするつもりは、全然無
いんだ。俺の名前は省吾 省吾だ」

固まったままのイチの耳に、省吾の名前が温かく染み込んでいく。じつと、不思議な優しい温もりを胸の中で抱き締めていたイチだったが、次に続いた彼の言葉が彼女に混乱をもたらしした。

「あんたは……？ あんたは、何て名前なんだ？」

何故、即座に答えることができないのか。

大きな目を更に見開いて、瞬き一つできなかった。

キーツが付けた『イチ』という『名前』。それを告げればいいということは解っている。しかし、どうしてか喉元で引っ掛かり、その『名前』は口から出てこない。

言うことが見つからなくて、イチはただひたすら省吾を見つめた。
「何で、そんな顔をするんだ？」

彼のそんな言葉が聞こえたが、イチには自分が今どんな顔をしているのかも判らない。

イチが見つめる中、省吾が動いた。

誰もが気味悪がるイチの真紅の瞳が真っ直ぐに向けられているこ

とを疎む気配など微塵も見せず、一步一步、ゆつくりと、だが確実に近付いてくる。

そして。

気付けば、イチは省吾が伸ばしていた手を全身で拒絶していた。今にもイチに触れようとしていた省吾の手を拒んだ『壁』はそれだけに止まらず、省吾は丸ごと弾き飛ばされ、背後の大木へと叩き付けられた。

「省吾！」

飛び出してきた大柄な男が省吾を抱き起こしたのが目の端に映ったが、ほぼ同時に、イチは身を翻して走り出していた。

何かを叫ぶ省吾の声を、背中で受ける。

何故、あんなことをしてしまったのか。

混乱した思いが、どうしようもなくイチを突き動かす。

触れて欲しかった。でも、触れられるのが、怖かった。

相反する気持ち、イチの頭の中を掻き乱す。

何もかもがぐちゃぐちゃだったが、唯一つ、これでもう、あの人は他の人たちと同じような目で自分を見るようになるだろうということだけははっきりしていた。

そう、それだけは解っている。

喉元につかえた熱く重い塊が、苦しかった。

*

跳ね飛ばされ、背中を強く打ち、省吾の肺の中の空気は残らず絞り出された。

省吾は酸素を取り込もうと大きく喘いだが、痛む背中でもそれまなならない。

「省吾！」

怒声と共に、武骨な手が背中を支えて抱き起こすのを感じた。

「おい、大丈夫かよ？」

肩を掴んで揺さぶらんばかりの勁捷の声に、そんなことをされては堪らないと、省吾は何とか自力で身体を起こす。と同時に、衝撃で遠のいていた記憶が瞬時に戻った。大きく見開いた目で、少女を探す。

彼女の姿は、すでに木立の奥へと消えつつあった。

「待つてくれ、逃げないでくれ！」

でき得る限りの大声でそう呼び掛けながら、省吾は勁捷の肩に手を掛け、そのごつい身体を半ば押しのけるようにして身を起こした。痛みを堪えて、もう一度叫ぶ。

「行くなよ！」

しかし、省吾の声は届かなかったのか、少女の背中は一度も止まることなく木々の間に消えていった。すでに見えないその姿を追いかけようと立ち上がりかけた省吾を、勁捷が取り押さえる。

「省吾、おい、落ち着けつて」

「……勁捷？」

ぼんやりと、彼がこの場にいることに今更ながら気付いたように、省吾は肩越しに振り返った。二度ほど、ゆっくりと瞬きをする。

「頭あ、冷えたか？」

細い肩を押さえた手はそのままに、勁捷は省吾の顔を覗き込んだ。「あんた、どうしてここに？　いつからいたんだ？」

やはり気付いていなかったのか、と肩を竦めつつ、勁捷は少年に答える。

「結構、前から。そうだな、名前を訊いているのが聞こえたぜ。お前なら気付かない筈が無かるうに、よっぽどあの子に気を取られていたとみえる」

醜態を殆ど全て見られていたと知り、省吾はバツが悪そうに顔を背けた。そんな少年を尻目に、勁捷は膝に両手を突いて立ち上がる。省吾の旋毛を見下ろし、勁捷は小さく息を吐いた。

「まったく、何処に消えたのかと思えば、こんなところでいちやついていやがつて」

首を振り振り勁捷が手を差し出したが、省吾はそれを無視して一人で立ち上がった。そのまま無言で歩き出す。

残された勁捷は伸ばした手を一瞬見つめ、肩を竦めて省吾の後を追った。

「おい、シヨウ。まったく、すぐにプリプリ怒りやがるな、お前は」

追い付いた勁捷はそう言いながらニヤニヤと笑う。その笑いに目をやることなく、省吾はむつつりと答えた。

「別に、怒ってなんか……」

「その顔とその声じゃあ、説得力は微塵も無いぜ」

呆れたように、勁捷は笑みを更に深くする。省吾は、もうこれ以上揚げ足を取られて堪えるものかとばかりに口を曲げ、むきになって足を速めた。

怒らせた少年の細い肩を見やりながら、仕方がねえな、と勁捷は苦笑する。

「ま、あっちも満更じゃあないようで、良かったじゃねえかよ」

肩を叩かれながらそう言われ、省吾は嫌味かと目を尖らせた。彼には、どこをどう取っても、少女に『逃げられた』としか思えなかったのだから。

何もしていないのに、傷つける気なんてこれっぽかしもないのに、どうしてあれほど怖がられなければならないのか。

あの、大きく紅い、心許なげな眼差しに、どうしようもなく胸が締め付けられる。この腕の中に閉じ込め、全身を使って安心させてやりたい。

だが、少女は逃げた。

訳が解らず、腹が立って、悔しくて、そして、悲しかった。

そんな省吾の渋い胸の内が手に取るように理解でき、勁捷はもう一度少年の骨張った背中を叩いてやった。

部屋に駆け込んできたイチを、キーツは眉をひそめて迎えた。常に流れる水か何かのように捉えどころのない静かな動きをするイチが息を切らせて走ってくるなど、今まで見たことが無かった。

「イチ……お前、何処に行ってたんだ？」

目を細めて、キーツはそう訊いた。これまで、イチがキーツに嘘偽りを言ったことは無い。しかし、今の彼女が返す答えは、どこか信用できない気がした。

「イチ？」

押し黙ったままのイチに、苛立った声で重ねて問う。

だが、彼女は肩で息をしたまま、俯いた顔を上げようとはしなかった。その小さな頭の天辺を見下ろすキーツの心中に、昼間覚えた嫌な予感が蘇える。

つい数分前までは、イチにとって自分は『特別』な存在であるという自信が、キーツにはあった。彼女を支配しているのは自分である、と確信していたのだ。その安心、あるいは油断は、今は焦燥に取って代わられている。

「まさか、外には行っていないだろうな……？」

キーツの台詞に、隠しようも無く、少女の細い肩がピクリと震えた。たったそれだけのわずかな動揺が、何よりも雄弁な返事となった。

「イチ？ どうなんだ？」

優しげにすら聞こえる声で、キーツはイチを追い詰める。何処に何をしに行ったのかはすでに判りきっている。が、イチの口から出た返事が、どうしても聞きたかった。

「答えるんだ」

穏やかな口調のまま、イチを促す。

塵が落ちた音だけでも空気が碎け散ってしまいそうな、沈黙。

そして、イチが答えた。

「外には、行っていないせん」

それが嘘であることは、火を見るよりも明らかだった。

「……そうか。なら、いいんだ」

そう言つて、キーツはイチに向けて手を伸ばしかけ、結局彼女に届くことは無くその手を下ろす。イチの嘘によつて生じた亀裂は、もしかしたら、キーツが彼女に触れることによつて埋めることができたのかもしれない。しかし、それでも、彼は目の前の少女に指先ですら触れることができなかった。

俯いたままのイチの横を通り抜け、キーツは扉に手を掛ける。

「もう、大分遅いな。あまりあちこちうろつかずに、おとなしく寝ろよ」

部屋を出がけに、キーツはそう言い残した。

廊下を歩くキーツの頭の中では、イチを繋ぎ止めておく為にすべきことは何なのかと言つことがめまぐるしく回つていた。先ほど彼女に手を触れることができなかったように、己の態度を変えることはできそうもない。ということとは、ただ一つ。イチの目が向いている相手の方を消してしまえばいい。今ならば、まだ、彼女自身が自分の気持ちにはつきりと気付いてはおらず、あの少年を殺したところで傷はまだ浅からう。再びあの二人が顔を合わせることの無いように、早急に手を打つ必要があつた。

自室に着いたキーツは、各砦に一部隊ずつ配備されている特殊部隊　すなわち、イチが現れるまではこの国で最強の兵士と呼ばれていた男たちの一人を呼び出した。彼らは、今では何らかの理由でイチが戦闘に出られない時の為の補欠としての立場に甘んじている。「お呼びですか、キーツ殿」

部屋に現れ、いつものように皮肉の色を含ませてそう言った男は、この砦の特殊部隊の中でも随一の能力を誇る、ゲオルグ・バッシュだった。

キーツはゲオルグに椅子を勧めることなく、己は机の角に尻を乗

せ、話を始める。

「一人消してきてくれ」

その短い言葉のみで、キーツはゲオルグに向けて一枚の写真を放り投げた。監視カメラの映像を拡大したもので画像は粗いが、たった一つの特徴が標的を決して間違えることのないものになっている。

「ちよつと待っててくださいよ。こんなガキを殺れてんですか？」

心底から嫌そうな顔で肩を竦め、ゲオルグはキーツに写真を返す。そのまま身を翻して部屋を出て行こうとした彼を、キーツの声が引き止める。

「給料一年分の特別手当を出すぞ」

振り返ったゲオルグの顔は、心の内を雄弁に語っていた。

「ガキ一人が、一年分？」

あの少女の無反応ぶりにうんざりして、気晴らしに他の奴をからかおうとでも考えたのかとゲオルグはキーツの顔を眇めて見たが、彼の真顔は裏に何かあるものとは思えなかった。

「本気、のようですね」

「至つてな。とにかく、頼んだ。そいつだって民間人じゃない。昨日この砦を襲撃した反乱軍の一人だ。確かに見てくれは子供だが、傭兵たちの中じゃあ結構名が通っているらしい」

「……へえ。ああ、そう言えば聞いたことがあるな。腕の立つ子供の傭兵がいるとか」

再び写真を手に取り、ゲオルグは物珍しそうに眺めた。

「多分、こいつがそうなんだろうさ。とにかく頼んだぞ。奴らは東の森の中に潜んでいるらしい。狙うのはその子供一人だからな、お前一人の方が身軽だろう」

そう言われ、ゲオルグは写真から目を上げてキーツに怪訝な顔を向けた。

「ちよつと待ってくださいよ。反乱軍の居場所が割れているなら、それこそ貴方の秘蔵っ子を使って一気に叩き潰しちまえばいいことじゃないですか」

「それがちよつと、な」

何でわざわざ余分な金を払ってまで、と言わんばかりのゲオルグに、キーツは言葉尻を濁す。成り上がり、しかも自分の能力を使つてすらいなないキーツに心底から忠誠を誓っている者は、皆無に近い。このゲオルグという男にしても、迂闊に弱みを見せるのは危険すぎる賭けだった。

「ま、色々と事情があるんだよ。あいつもまだ子供だからな」

「……そうですか。まあ、いずれにせよ、命令とあれば行ってくるしかないですね」

それ以上食い下がつても得るものはないと悟つたゲオルグは、あまり真面目にやっているようには見えない敬礼をキーツに向けて投げ、扉に向かう。

「じゃ、特別手当の方、くれぐれも忘れないで下さいよ」

最後にそう残し、ゲオルグは去っていった。

一人になったキーツは、こつこつと机を指で弾きながら考える。今の男が見事任務を果たして帰ってきたとして、彼をそのまま生かしておくことでどんな利点があるのかを。ゲオルグは特殊部隊の兵士たちの中でも、立てた武勲が一際目を引く男だ。そんな男を公然と処刑するには余程の理由が無ければならない。仮に暗殺させるとしても、あれだけ腕の立つ男を始末させるには、やはりそれなりの腕を持つ者が必要となる。結局、堂々巡りとなる可能性は充分にあった。

「相打ちになつてくれるのが、一番都合がいいんだけどな」

ぼやいてはみたけれど、そううまくはいかないことをキーツは重々承知していた。

「……仕方ないか」

呟き、重い腰を上げる。

部屋を出たキーツは、再びイチの部屋に向かう。いつに無く険しい顔をして廊下に行く彼に、擦れ違ふ人々がちらちらと視線を送つたが、キーツは一向に意に介さず歩みを進めた。

目的の場所に着いたキーツは、二度ほどその扉を叩いた。が、返事が無い。

「イチ？ 入るぞ？」

その言葉と同時に扉を開ける。キーツが部屋に一步踏み入れるとイチが驚いたように寝台から身を起こすのが視界の隅に入った。

「……どうした、イチ？ お前らしくないじゃないか。俺が部屋の前に立ったのも気が付かなかったのか？」

苦いものが滲み出てしまいそうになるのを辛うじて抑え、努めて軽い口調でキーツはそう言った。

「あ……」

明らかにいつもと違うイチの口籠りように、キーツの中で正体の判らない苛立ちがこみ上げてくる。後ろ手に戸を閉め、つかつかとイチの傍に歩み寄った。彼女はやや俯き気味にキーツから目を逸らしている。その様は、怯えているようにすら見えた。キーツの中から、苛立ちが引き潮のように遠のいていく。

「イチ、俺を見るんだ」

言われ、ゆっくりと彼女の視線が上がってくる。だが、キーツの目と合わせようとはしなかった。

「本当は、あいつのところに行ってきたんだろう？」

腰を屈め、イチの顔を覗き込むようにして、キーツは静かにそう問いかけた。彼女はわずかな身動きもしない。ただ、瞬きを一度だけ。

「正直に答えてごらん。怒りはしない」

作ったものではない、穏やかな声。今、この時、先ほどキーツの心の中に湧き上がってきた理由の判らない苛立ちが彼の中から消え去っていた。不思議なほど、心を空にすることができた。

「……キーツ大佐……」

細い声が、ようやくそれだけ紡ぎ出す。キーツは言葉を使わず、目だけで先を促した。イチからの告白は、すぐには成されなかった。再び俯いてしまったイチは、自分に注がれているキーツの視線を

痛いほど感じていた。しかし、いつもならば否が応でも伝わってくる彼の思考が、今は全く響いてこない。それが、無性に不安だった。キーツはイチが自発的に何か言葉を口にするのを、辛抱強く待つ。蝸牛が這うように時間が流れ、そして、イチの口が開いた。

「本当は、外に行っていました」

顔を伏せ、蚊の鳴くような声でやっとそれだけ言う。うな垂れ、身を硬くしているイチの肩は、いつもより尚一層細く見えた。

キーツは、それが溜め息に聞こえないように、軽く一つ息を吐いた。

「初めから、正直にそう言えば良いんだよ」

彼のその言葉に、イチは尚更小さくなる。何か間違ったことをした時には罰が与えられる。それが『決まり』だった。

全身を耳にして罰が言い渡されるのを待ったが、次にイチに届いたのは全く違う、そして更に彼女が恐れていたことだった。

「それで、あいつに逢ってきたのかい？」

キーツの心を読まなくても、彼の言う『あいつ』が誰であるのかははっきりと判った。言葉で返事するのが怖くて、イチは小さく頷いた。

「……そうか。やはりな。で、どうしたんだ？ まさか、あいつを殺しに行ったわけではあるまい？」

『殺す』と言う言葉に、イチの肩が大きく震えた。どうやらここに付け込む隙がありそうなことを、キーツは見逃すことなく察知する。

「殺してはいないようだな。……じゃあ、骨の二、三本でも折ってきたか」

『良くやった』という色を滲ませてそう言うと、イチの震える声が答えた。

「わたしは、あの人をはじめてしまいました。そして、あの方は、木に……」

「叩き付けたのか？ なんだ、一人で反乱軍を潰しに行ったのなら、

最初からそう言えば良いんだぞ。まあ、確かに許可無く外に出たことは罰則ものだが、その為だったのなら、情状酌量の余地がある」

キーツは立ち上がり、部屋の中を往復する。あと一押しでイチの中のたわいのない幻想など消え去ってしまうだろう事が容易に推測できた。

「しかし、たとえ死んではいなくとも、あいつにもお前の力が良く理解できたことだろうな。指一本触れずに人を吹き飛ばす力だ。さぞかしびびっていることだろうよ。ことによると、今頃反乱軍から逃げ出しているかもしれないなあ。何しろ、お前の力を、身を持って体験したんだからな。普通の奴なら、二度とお前の前に立とうなんて気は起こさなくなるだろうさ」

己がどんな生き物として他の人々の目に映っているのかということとを、思い出させる。

キーツはイチの前で足を止め、再び彼女の顔を覗き込んだ。強張った彼女の身体は、小刻みに震えていた。

「なあ、イチ。お前が存在を赦されるのは、この俺の隣でだけなんだぞ。お前が俺の言うことを聞くということが解っているから、他の奴らは何も言わないんだ。そうでなければ、とつくの昔に、お前の力を恐れるあまり盲になった奴らに殺されていたとこだ。それを忘れるなよ」

今までにも何度も繰り返されてきたその言葉に、イチは小さく頷いた。

「……わかっています。キーツ大佐がいたから、わたしは生きてこられたのです」

か細い声ではあったがいつもどおりの素直な返事に、キーツは自分の台詞が充分効を奏していると確信する。これでゲオルグがうまくやってくれれば万々歳というところである。

望んだ効果が得られ、すっかり気を良くしたキーツは、立ち上がり、扉に向かう。今はイチの気が動転している為にこちらの思考を読まれずに済んでいるようだが、良からぬ企みを胸に秘めている時

は、あまり彼女の近くにいるべきではなかった。

「今俺が言ったことをイチがちゃんと理解していれば、全てうまくいくんだ」

扉に手を掛け振り返ったキーツは、出掛けに最後の駄目押しとばかりにそう残す。

キーツの姿が消えるまで見送ったイチに残されたのは、諦念だけである。省吾と会って彼女の中に芽生えかけていた何かは、キーツの手によって握り潰された。いや、最初から、何かの間違いに過ぎなかったのかもしれない。

イチは寝台から立ち上がり、窓辺へと歩み寄った。遠くには鬱蒼と広がる森が　省吾のいる森が、見える。

どうして、あれほど彼に逢いたいと思ったのか。

どうして、その気持ちを抑えようとは思えなかったのか。

会いに行かなければ、良かった。

今、イチは生まれて初めて、後悔というものを噛み締めていた。

密命を受けたゲオルグは、気配を消し、コソリとも物音を立てずに森の中を進んでいた。慎重ではあるが、歩く速度は平地を行く時とそうは変わらない。もともと、編隊を組んでの行軍よりも、こういった隠密行動の方が得意なのである。

森に入って丸一日経つが、敵も巧妙で、なかなか気配を見せようとしない。

変わらぬ歩みの中、ゲオルグは今回の任務について考えていた。

なぜ、あんな子供を一人殺すのに、あれ程法外な報酬をぶら下げてみせたのか？

兵士の間でのキーツについての評価は、誰に訊いても同じものが返ってくるだろう。

化け物の腰巾着、ただそれだけだ。

それ故に今回のこともあの少女絡みであることは間違いない。しかし、いったいどういう絡みなのか、それが全く見当もつかなかった。

「そう言や、今回、初めてアレがしくじったんだっただ……それと関係あるってのか？」

ゲオルグは声に出して、そう呟いた。実のところ、彼には今回の任務に対する疑問があった。誤解の無いように言っておけば、これが王直々の命令であれば、たとえどんなものであるうとも、何一つ迷うことなく従っていたのである。しかし、今回の発令者はあくまでキーツであった。他の多くの兵士たちと同様に、ゲオルグ・バッシュは、王に対しては絶対的な忠誠を誓っていたが、キーツ・アンドロフ個人に対しては全く従う気はなかった。化け物じみているとは言え、自分の子供とも言える程の小娘の後ろでデカい顔をしている男に、いったいどんな敬意が払えるというのであるうか。

ふと、決めあぐねていたゲオルグの足が止まった。小さく舌打ち

をもらす。

「しまった……見つけちゃったよ」

まだ遠くはあったが、複数のヒトの気配は間違いようが無かった。枝振りの良い樹を選んで登り、スコープを取り出した。木々の隙間から、辛うじて個人の判別がつく。どうやら、食事の最中のようなであった。倍率を調整しつつ、標的を探す。

いくつかのグループができており、そのうちの一つ、上品そうな青年二人、初老の男一人、体格の良い男一人の中に、痩せた少年の姿があった。

「アレかあ……どう見ても、ガキだよな。どうしたもんかな」

スコープを覗いたまま、ゲオルグはぼやく。この時はまだ、この逡巡が、迷う余地を取り除いてくれることになるとは知るべくもなかった。

*

夕食は、猪の肉だった。丸々と良く肥えた猪は、大所帯を賄っても余る程であった。

「まったく、あんたらといると食事に不自由しなくていいよな。…

…？ どうした、ロイ？ 石でも入ってたか？」

勁捷は隣に座っているロイの手が止まったのに気付き、肉を頬張ったまま訊ねる。

「あ、いや……何でもない。ちょっと用足しだ。構わず、食べていてくれ」

そう言いおいて、ロイは立ち上がる。

「何だよ、小便か？ 飯の前に行つときやいいのに」

「まあ、そう言われても、こればかりはいつ来るか判らんからな」

「ま、そりゃそうか。肉は残しといてやるから、ゆっくり行つてきな」

「頼むよ」

片手を挙げてそう言い残し、ロイは茂みの中へ入っていく。

「ああ？ 何だよ、あんな奥まで行く事はないだろうに」
姿が見えなくなったロイに、勁捷はそう呟く。

「あんたのように、無神経じゃないんだろ」

突っ込んだ省吾に、勁捷はいかにも心外だ、というふうに目を丸くする。

「俺ほど繊細なやつはいねえぜ？」

「あんたが繊細なら、熊だって世を夢んで死んじまうよ」

ボソリと返した省吾に、勁捷はわざとらしく大きな溜息を吐いた。
「やっぱ、子供には大人の心遣いつてのが解んねえんだろうなあ」

ロイが席を立った後でも、そこでは全く変わらぬ食事風景が繰り広げられていた。

*

「くそ、美味そうだな、あいつら。もういい、やっちまえ」

ゲオルグは、意を決して狙撃銃を袋から取り出し、組み立て始める。これまでも何度か繰り返してきた作業には、五分とかからなかった。

完成したそれを、肩に担ぎ、照準を覗いた。その時。

「そこまでだな」

突然下から響いた声に、ゲオルグは危うく銃を取り落としそうになった。辛うじてそれはせずに済んだが、下に向けて構えるほどの余裕は無かった。対して、樹下の相手はびたりとこちらに銃口を向けている。そこに立っているのは、少年のグループにいた、初老の男であった。

「あんた、いったい、いつの間に……」

「すまん、驚かせたか？」

惚けた言い様だったが、怒ることすらできない。そんな茫然自失のゲオルグに向かって、初老の男。ロイは、穏やかに促した。

「さあ、その銃を下に落として、ゆっくり降りてくるんだ」

*

ロイが連れ帰った男を前に、一同は驚きを隠せなかった。

「あんた、ほんとに何者なんだ？」

「まあ、年の功というやつかな」

飄々としたロイの様子に呆れながらも、勁捷は心底ゾツとする。

ロイ以外の誰も、この狙撃手の存在に気が付かなかったのだ。男が持っていた狙撃銃は、非常に高性能だが、その分値も張るものであり、並の兵には支給されない。これだけの逸品を任されているということは、その腕も相応に信頼されているということだろう。ロイが阻止しなければ、狙われていた者は、運が良くて重傷　まず間違いない命がなかったことだろう。

「まあ、無事で良かったつてもんだよな。んで、あんた、名前は？」
取り敢えず、勁捷はそう問うたが、答えは期待していなかった。
能力があるということは、さぞかし口も堅かるう。案の定、男は瞋目したまま、唇はピクリともしない。

並の尋問では口を割らないだろう。それなりの手段は必要だろうかと、勁捷が考えあぐねているのをよそに、リオンが男の前に立った。

「貴殿、ゲオルグ・バッシュであろう？」

初めて男が反応した。

「そう言う貴方は　リオン・a・リーヴ？　いつたい　」

男　ゲオルグの目が、目前に居る人物が信じられずに目を見張る。

「この『反乱軍』を率いているのが私だと、知らなかったのか？」
「まさか、そんな……貴方は誰よりも陛下に忠誠を尽くされておられた筈。何故このような事に……？」

ゲオルグは、自分の目が信じられないように、何度も首を振る。

「私にも思うところがあるのだ。だが、決して国に背く気持ちはない」

「何をそのような。明らかな反逆ではないですか！」

「確かに、行為はそうかもしれないが、心は違う。私は、陛下にもっと民草の事を見てもらいたいのだ。そして、民草には、もう少し自分たちの境遇に疑問を持ってもらいたいのだ。貴殿は、今の民の暮らしについて、何も思わないのか？ 彼らは、生きているのだ。税金を納めるためだけにいるのではない」

「自分は、ただの兵士です。そのような事を考える必要は無い。貴方もそうです。貴方の本分は、陛下をお護りすることではないのですか？」

ゲオルグは頑なに唇を引き結ぶ。

「そうだ。今は陛下に弓引いているかもしれない。だが、これは国を、ひいては陛下をお護りすることになると、私は信じている」

「戯言だ！」

「いいや、聞いてくれ。今のままでは、いつか必ず、民から不満が噴出する。誰か一人が声を上げれば、暴動が起きるだろう」

「そうになったら！ そうになったら、我らが叩き潰します。それが我らの責務だ」

「それを何度繰り返すつもりだ？」

「何度でも！」

一步も譲らない眼差しで、ゲオルグが言い放つ。そんな兵士を、リオンは悲しみと共に見つめる。

「それでは、いずれ国は疲弊するぞ。国の大部分を占めるのは、民草なのだ」

リオンの静かな口調に、ゲオルグは二の句が継げなくなる。

「陛下の為されている事が必要であるということは、今はもう、解っている。だが、陛下は国を治めようとしているあまり、民草一人一人の事を見ようとはされない。彼らもヒトだということを、もう少し考えていただきたいのだ」

リオンの声は、荒立てたものではないからこそ、よく通る。だが、ゲオルグはやはり、王の兵士であった。

「貴方の仰りたい事は解ります。ですが、自分は王の御心に従います」

リオンの眼差しとゲオルグのそれとが、真っ直ぐにぶつかり合う。どちらにも、迷いは一片もなかった。

「そうか……。それはそれで、貴殿の進む道はあるな」

呟き、リオンは小刀を取り出した。そして、ゲオルグを捕らえていた縄を切る。

「よろしいのですか？ 自分を解放すれば、すぐに追討するかもしれません」

「構わない。私は逃げも隠れもしない」

真直ぐにそう言い放つリオンを、ゲオルグはどこか眩しそうに見る。

「貴方は、全く……変わらない」

「私は私だ。変わる気はない」

そんなリオンに、ゲオルグは微かに笑みを漏らす。

一区切りが付いたところで、エルネストがふと気付いたようにゲオルグに訊ねた。

「リオン様の事を知らなかったという事は、貴方が狙ったのは誰だったんですか？」

ゲオルグは一瞬ためらったが、元々あまり従う気は無かった命令である。

「そちらの少年です 王からの命ではないと思いますが」

突然、話を振られ、省吾は面食らう。

「いったい何だって、また、省吾殿が？」

一同、皆、訳が解らず首を傾げるのへ、ゲオルグは同じように首を傾げながら続ける。

「恐らく、あの少女絡みだと思うのですが、詳しい事は知りません。命令は、少女の上司から出たものですので」

あくまで、自分の上司ではない事を強調する。

「そう言えば、あの少女も何か少しおかしかったな……。貴方達が砦を襲撃してきた時、自分等が出動したのですが、実のところ、彼女が現れて以来、我々特殊部隊は、殆どお払い箱状態だったんです。我々に与えられるような任務を、彼女はたった独りで、より効率的にこなす事ができていましたから。彼女が出た回数自体がそう多くはないとはいえ、彼女が任務を達成せずに戻ってくるなんて、今まで聞いた事がなかった」

「あの時か……？ あの時、あの子は急に逃げて行っただ。俺は何もする気は無かった……。ただ、近くに行きたかっただけだったのに」

「近くに、か。今まで、あの少女から遠ざかろうとする者はいても寄って行こうと思う者はいなかったからな。逆にそれにビビったのかもしれん」

「けど、近寄っただけだ。そんなに脅かすような事はしなかった」ムツツリと、拗ねた様な省吾に、ゲオルグは硬い顔で答える。豪胆な男の顔に、わずかに恐怖が見て取れた。

「あの少女は 人の心を読むのだ。それに、あの力。だから、皆彼女からできるだけ離れようとする。多分、これまでに彼女が自分に向けられたものとして感じ取った感情は、恐怖だけなのだろう。少なくとも、欠片でも好意的なものは、向けられた事が無いだろう」その言葉に誇張が無い事は、ゲオルグの表情を見れば判る。省吾は俯き、唇を噛み締めた。あの子がそんな所にいるなんて、許せなかった。

「絶対に、あの子は貰う。俺が連れて行く」

今はどんなに怖がられていようと、そんな必要はないのだという事を解らせてやる。たとえどれほど時間がかかろうとも、だ。

省吾の決意に、ゲオルグは信じられないというふうに首を振る。

「あれは、まさに『化け物』だ。近くにいれば、嫌でもそれを思い知る。いずれ、怖れ、疎んじるようになるぞ？」

「そんなことは無い。有り得ない」

省吾自身にも、なぜこれほどまでに確信があるのかが解っていない。それでも、あの少女を傷つけることなど、あらゆる意味において、有り得なかった。固い決意に、省吾は爪が食い込まんばかりに両の拳を握る。

その場に佇む一同は、出会った頃にはただの「子供」であつた少年が、このほんの数ヶ月の間に大きく変わりつつあることを、確かに感じ取っていた。

まず、宣戦布告をしたいというのがリオンの弁であった。

ゲオルグは、すでにこの場にはいない。しばらく森の中をウロウロし、ほとぼりがさめた頃に、「見つかりませんでした」と戻るつもりだという。

立場の等しい、だが、取る行動は正反対の相手と対峙し、リオンはもう一度だけ、王との話を希望した。

「私は、単なる反逆者として見られたくないのだ。王に背くことが目的ではなく、王の目を違う方向に向けることが目的なのだから」
彼独特の真っ直ぐな瞳で一同を見渡す。

「私は王と一対一の話し合いをし、私の理想とするところを王に説きたい」

そう、もう一度だけ。

未練だな、とリオンは思った。それは重々承知している。

だが、言葉で何とかなるなら、そうすべきではないだろうか。

揺らぐ主人の心境を感じ、エルネストが立ち上がった。

「確かに、リオン様のおっしゃるとおりですね。ただの破壊活動を好む集団だと思われるは何の意味もありませんから」

「しかし、どうやるね？ どこかへ誘き出すって訳にはいかねえだろ。あの王様は滅多に城から出て来ねえしな。かと言って、王宮へ忍び込むのは、この間罅へ侵入したのとは訳が違うぜ」

至極もつともな勁捷の台詞に、リオンは言葉に詰まった。実際のところ、具体的な方策は思い付いていなかったのだ。

「うむ。それが問題なのだ」

「おいおい……考え無しかい」

勁捷は呆れたように目玉を天井に向ける。

「まあ、それはこれから皆で知恵を出し合っつてことで」
エルネストの援護に勁捷は溜め息を返した。

「あのな、王宮のことなんぞ全く知らない俺たちに、あんたら以上の考えが出てくるわけが無かるうよ」

「突っ込めば何とかなるんじゃないか？」

省吾の提案は、彼以外の者から一刀の元に斬って捨てられた。

「却下」

まるで手も足も出ない達磨状態となった、その時、ロイが静かに口を開いた。あまりに穏やかなその口調に、一同が危つく聞き落としそうになったほどだった。

「王宮には王の寝室に通じる隠し通路がある。それを使えばよい」
「何故、貴殿がそんなことをご存知なのだ」

リオンの声が自ずと尖ってしまったのは、近衛時代の名残であるう。視線も険しく、ロイを見つめた。だが、彼の倍以上も生きている男は、それを静かに受け流す。

「答えは簡単だ。私はかつて王の密偵だったからだよ」

ロイの告白に、リオンはもとより、エルネストと省吾も少なからず驚きを見せていた。確かに只者ではない物腰をしていたが、それほどのものであるとは思ってもみなかったのだ。

その場でただ一人納得したような顔をしていたのは、勁捷のみである。これといって確信があったわけではないが、そういうような生業に就いていた者であろうことは薄々感付いていた。

何度か口を開閉し、ようやくリオンは二の句を継ぐ。

「密……偵、ですと？　しかし、税を払えなかった、と……」

「表向きの身分は商人だった。まさか堂々と密偵ですと言い触らすわけにもいくまい」

「だが、それなら税を払えなくとも、罰は……」

「いや、それは理由にはならない。王は極めて公平な方だ。それに、税を払えないのに罰せられない者があつてはまずいだろう？　疑われ、密偵であることが知られることになる」

ロイ以外の者は、言葉を失ってしまう。

仮の身分に納税を強いる王も王だが、それを払えなければ罰せら

れても当然だと言い切ってしまったるロイも、彼らの理解の範囲を超えていた。

「密偵の第一条件は、疑われないことだよ」

何でもないことのようにそう言ったロイを、勁捷はまじまじと見つめる。

こいつあ、俺なんぞ足元にも及ばんわ。

内心での呟きを聞き取ったかのように、ロイが勁捷の視線を受け止め、笑みを浮かべた。

二人の無言のやり取りには気付くことなく、リオンは息を吹き返す。

「では、そうだな……皆には陽動をお願いする。その隙を縫って、私はロイ殿に教えて頂く通路を使って、王の元まで行こう」

「まあ、そうですね。まさかこちらが隠し通路を知っているとは思っていないでしょうから」

だが、このエルネストの見解にはロイが異を唱えた。

「いや、私がリオン殿に付いたことには、王はもう気付かれている筈だ」

「それでは、隠し通路は役に立たないと……？」

肩を落としたエルネストに、リオンが不思議と自信に満ちた口調で断言した。

「私は、王は隠し通路に何も仕掛けていないような気がする」

「『気がする』ですか？ 根拠は何処に？」

その台詞は穏やかなものであったが、エルネストはやや苛立ちを覚えるのを禁じ得ない。ことは自分の命に関わることだというのに、何処まで単純にできているのかと、怒鳴ってやりたくなるのを、抑えた。

「リオン様、もし通路で挟み撃ちにされたらどうするつもりです？ 私とあなたの二人だけで切り抜けられると？」

内心は苛々と、だが表面は平常を保ったエルネストだったが、続いたリオンの言葉について椅子を蹴って立ち上がってしまう。

「私は独りで行く」

「何ですって!？」

「私は独りで行く、と言ったんだ、エルネスト。お前が私のことを案じているのはよく解っている。だが、供を一人でも連れて行けば、王は私の言葉を聞こうとはしないだろう。私が王を信じてこそ、王も私を信じてくださるのだ」

「あなたという人は……!」

今、この時、エルネストの中では、『こんな莫迦な男はさっさと見捨ててしまえ』という声と、『いや、どんなに莫迦な人でも、この方を見捨てることはできない』という声とがせめぎ合っていた。瞑目しているエルネストを、リオン以外の三人は半ば同情を示しつつ見つめる。

長くて短い、深い葛藤の後、エルネストは無言で蹴り倒した椅子を戻すと、それに腰を下ろした。

「いいです。解りました。私はあなたに付いていくと決めたのですから、最後までそれを貫き通します」

けれど、と、エルネストは露骨にホッとした顔を見せるリオンに強い眼差しを向ける。

「私は、あなたが王に対して行ったのと同じ誓いを、あなたに対してしているのですからね。もしも、万一あなたが命を落とすようなことがあれば、私もこの首を斬り落としますから、それをよく覚えていてください」

「解っている」

その真っ直ぐな視線で力強く頷くリオンに、エルネストは本当に解っているのだろうかと、深々と溜め息を吐く。

脱力しきったその姿にいささか気の毒に思ったのか、ロイがエルネストの肩を叩く。

「私も、リオン殿の言葉は間違っていないと思うよ。王は、恐らく隠し通路には何の細工もすまい」

「ロイ殿までそうおっしゃるのなら、きっとそれが正しいのでし

ようね……」

もうどうにでもなれと言わんばかりの風情で、エルネストはそう呟いた。

「そんじゃあ、もう一回仕切り直そうか？」

主従の争いに終止符が打たれたのを見て取り、勁捷がやや笑いを堪えながら、一度大きく手の平を打ち鳴らした。

「そうだな」

頷いて、リオンは王宮の見取り図を描き始める。近衛に上がった時、広い王宮で迷ってはいけないと、必死で覚えたものだった。その出来栄えに感心しながら、ロイがそこに隠し通路を描き入れた。

「入り口は、正面のこの二つしかない。突入した後、三方に別れるこの廊下と、これと、これだ」

そう言いながら、リオンは真っ直ぐ正面に伸びる廊下と、それに直角に交差する二本の廊下を指す。

「この正面に向かっているのは玉座に通じている廊下だ。当然、最も重要で、あの少女が来るとしたら、ここではないかと思う。ただ、侵入するのは夜だから、絶対とは言えん。こちらの右のは、主に女の仕事場で、炊事場や洗濯場、風呂場などだ。これが一番手薄だろう。そして、この左に向かうのは兵士たちの休憩所や訓練所などに通じている。人数が最も多いとすれば、ここだな。他にも細かい通路が幾つかあるのだが、主なものはこんなところだ」

リオンに代わり、ロイが説明を付け加える。

「隠し通路の入り口があるのは、炊事場の壁のこの辺り、そこから先は王の寝室へ一本道だ」

ロイが口を閉じると、真っ先にエルネストが見取り図に指を伸ばした。

「私は、この右の行きます」

「俺は、この真ん中」

これは当然省吾である。

「じゃ、俺は余り物か？」

ぼやいた勁捷を、ロイが宥めた。

「私もその左の廊下に行くよ」

「よし、では分担は決まったな。右と中央の廊下には五人ずつ、残り左に配置しよう」

リオンは立ち上がり、右手を差し出す。エルネスト、ロイ、勁捷、そして省吾は、それぞれ己の右手をそれに重ねる。

「あなた方の役割は、あくまでも陽動だ。決して無理はせず、危険と思った時は迷わず退却して欲しい。それだけは強くお願いする」

果たしてその『お願い』がどれほど実行されるかは各々の理由により甚だ疑問であったが、リオンの言葉に四人は深く頷いた。

十三

草木も眠る丑三つ時、当然のことながら、炊事場には誰一人いなかった。

「よし、私は行ってくる」

ロイに教わったとおりの操作で口を開けた通路の入り口に片手をかけ、リオンはエルネストにそう告げる。同行した五人は、至る所に仕掛けを作るのに余念がない。

今のところ彼ら以外動くものは存在していないが、他の二組が行動を開始すればどうなるか判らなかった。

「ご無事で」

本心を押し隠す為、エルネストの言葉は少ない。

「無理はするな」

リオンはそう言おうとし、止めた。自分が無事に戻ってこない限り、この乳兄弟は決してここを離れようとはしないだろう。

「待っている」

一言、リオンは告げる。

「はい」

暗色のマントを翻し、素っ気無いほどの潔さで通路の暗がり消えていくリオンの背中を、エルネストは目では確認できなくなるまで見送った。

*

正面の廊下を走り、全く妨害のないまま、省吾は玉座の間へと到着した。

外れたか、と周囲を見回した省吾の耳に、聞き覚えのない男の声が届く。

「やあ、坊主。栄えある玉座の間へようこそ」

声の主を探して振り返った省吾は、玉座の両横に下げられたカーテンが揺れ、そこから一人の男、そして少女が現れたのを見る。

省吾に付いてきた五人の男が、揃って銃を構えた。

「おやおや、随分たくさんのお守りを引き連れてきたものだな。ま、仕方ないか、坊やじゃ」

「……！」

揶揄する男の声で血が昇りかけた省吾の頭に、その時、ロイの言葉が蘇える。

「頭を冷やせ、馬鹿野郎」

目を閉じ、低く自分に言い聞かせた。

顔を上げ、省吾は男を睨み据える。そのまま、背後に立つ男たちに告げた。

「あんたたちは勁捷たちのところに行ってくれ」

「しかし……」

「俺は大丈夫だ」

当然その言葉は聞き入れかねて顔を見合わせた男たちに、省吾の鋭い声が飛ぶ。

「行け！」

並々ならぬ決意をそこに感じ取り、男たちは一瞬の躊躇の後、廊下を走り出す。

「坊主？ 無理はしなくても良かったんだぜ？」

「俺の名前は、省吾だ」

敢然と言い放つ。その気迫に、男は眉を上げた。

「そいつぁ、悪かったな。俺はキーツだ。キーツ・アンドロフ。イチの育ての親だよ」

「イチ？」

「おや、知らなかったか？ こいつの名前をよ？」

「イチ……それが名前なのか？」

「ああ。こんな力を持っているのは、他にはいねえからな。一人しかないから、イチ。こいつの遺伝子は、分析するとニッポン系が

一番強いらしい。俺は古語は得意じゃないが、古ニッポン語じゃ、
一のことをイチってんだろ？」

薄く笑いながらそう答えるキーツに、省吾は柳眉を逆立てた。

「そんなのを名前にすんなよ！」

「何言ってるんだよ。こいつだって気に入ってたんだぜ、なあ？」

隣にひっそりと立つ少女に、キーツは同意を求める。

「はい。わたしはこの名前を気に入っています」

感情の籠らない鸚鵡返し。人形のような少女の眼差しに、省吾は
激しく首を振った。今までに出したことのないほどの大声を振り絞
って、訴える。

「違う！俺はあんたが思ってることを聴きたいんだ」

「無理だよ。こいつは凄え力は持っているけど、感情は無いんだ」

「そんな筈は無い……絶対！」

省吾は、あの時彼女が見せた怯えを、はつきりと覚えている。あ
れが感情の発露でなかったら、いったい何だというのだろう。

硬く拳を握り締め、省吾は己の優位を確信しているキーツを見据
えた。

「あんたがその子をそんな風に思っているなら、俺が連れて行く」

「お前が？こいつを？」

銃を抜いた省吾を、キーツは面白そうに眺めた。そして、自分の
銃を構える。

「いいだろう。お子ちゃまが何処までやれるか、見てやるぜ」

言い終えると同時に放たれた銃弾を、省吾は横様に跳んでかわし
た。そのまま、飾り柱の影に隠れる。

*

「勁捷、私はちよつと抜ける！」

省吾と共に行った筈の男たちが五人だけでこちらへ走ってくるの
を目にし、ロイは勁捷へ一声掛け、走り出した。

「ああ、ここは俺一人でも充分なぐらいだぜ」

すでに二十人ほどの兵士が姿を現している廊下の先に視線を向けたまま、勁捷はそう返す。すでに罨は充分に仕掛けてあった。あと少し引き寄せれば、かなりの数を行動不能にすることができる。

「ロイ、あの少年が一人でやると……！」

擦れ違いざまに不安そうな声を投げてくる男たちへ目で返し、ロイは玉座の間に向かった。

「冷静になれと言ったであろうが！」

その場にいない少年に向けて、苛立った声を上げる。失ってしまった息子と省吾を重ねていると言うことは、自分でもよく解っていた。それが愚かなことであることも。

省吾と息子は全く別の存在であり、彼を救ったからといって息子を死なせてしまったことの贖罪には成り得ない。

だが、それでも、笑うことすらろくにできないあの少年を助けることができれば、あの時から止まってしまっている自分の中の時を再び動かすことができるのではないかと、思ったのだ。

頼むから、間に合ってくれ。

神以外のものに、祈る。息子を亡くした時、同時にロイの中で神は死んだ。

目指す場所は、そう遠くなかった。直に、絶え間なく響く銃声が聞こえてくる。足を止め、耳を澄ませて状況を窺った。

「やや劣勢、か……」

省吾の銃声よりも、相手のそれの方がより頻繁に轟く。

「弾切れを狙うつもりなのか……？」

省吾の作戦を慮り、ロイが呟く。気配を消し、開け放された玉座の間の扉へと近付いた。

あと少し、というところで、唐突に銃声が止む。

気付かれたか、と足を止めたロイの耳に、省吾のものではない男の声が届いた。

暗い通路を駆け抜けながら、リオンは、この先で待っている王の存在を、確かに感じていた。早く来いと、呼ばれているような気さえる。

入り口からここまで、走り続けてきたその足が止まる。

手元の小さな灯りが、通路が行き止まりになっていることを教えた。

「着いた、な」

手探りで壁を調べると、右隅の方に小さな突起が見つかった。口イに教えられたとおりそれを手前に引くと、ゆっくりと扉が開き始める。

暗闇に慣れた目に、突然溢れた光は強すぎた。目を細め、何度も大きく瞬きをする。

徐々に、周囲の様子が見て取れるようになってきた、と同時に、正面の椅子に深く腰掛けた人物の姿に、リオンは咄嗟に膝を突いてしまう。

「随分、遅いな」

今の時刻がなのか、あるいは、会いにきたこと自体が、なのか。彼が敬愛してやまないその人物は、ゆったりとそう言った。

「王」

立ち上がり、リオンは低く呟く。

「久しいな。息災だったか？」

肘掛に頬杖を突いた優雅なその姿は、最後に見た時のままだった。

「再びお会いすることがあるうとは、夢にも思いませんでした」

「そうか？ 余はそうでもなかったぞ」

直立を崩さないリオンを、王は薄く微笑みながら見つめている。

「今宵は、王へ最後の進言に参りました」

「よい、聴こう」

更に背筋に力を込め、リオンは続ける。

「どうか、民の暮らしをもう少し顧みてやってください。税を納めるだけの生活では、あまりに人間の生活というものからかけ離れています。きつ過ぎる締め付けは、いつか弾けます。その時の民の激情は、全て王に向けられることでしょう。そうなってからでは、遅すぎるのです」

王は、その長い睫毛を軽く伏せたまま、微動だにしない。リオンは姿勢を崩さず彼の口から何らかの言葉が発せられるのを待った。実際にはそうでもなかったのだろうが、リオンには永遠のようにも感じられた時間の後、王の唇がようやく開く。

「お前は、余に、心優しき王になれと言うわけだな？」

「……」

「慈悲でもって民を治めるような？」

「……はい」

「できぬな」

王の即答にも、リオンの視線は揺らがない。半ば予想した言葉だった。

「余は、偽善の結果生じる混乱よりも、恐怖でのみ成し得る安寧の方を望む。リオンよ、人は決して現状に満足できない生き物だ。わずかでも自由を与えれば、もっと自由を、と望む。それに応じれば、更に多くのものを。どんなに与えても、必ず、それに不平を唱える者が現れるのだよ」

「そんなことは……」

「無いと言えるかね？」

押し黙ったリオンに、王は笑みを漏らした。

「少し大人になってしまったかな？」

言われ、リオンは弾かれたように顔を上げる。

「人の暗い面しか見えなくなることが大人になると言うことならば、私は永遠に子供のままでも構いません」

その時、確かに、王は微かだが声を上げて笑った。十四歳の時に近衛隊に入り、その後五年間伺候していたが、王の笑い声を聞いた

のはこれが初めてだった。

「そうだな、余もそれを願う。行くがいい、リオンよ。お前はお前の信ずる道を行くがいい。余は余の信ずる道を行く」

「その道が交わることは無いのですか」

「無い。余とお前とでは、人間そのものに対する考え方が違いすぎる。根本からして違うのだよ」

穏やかな表情で、王はそう告げた。

王の心は深すぎて、リオン如きにはその底にあるものを見ることはできない。

リオンは一度目を閉じ、開いた。最後の最敬礼を、深く、王に向ける。

「私はこれ以降、貴方に弓引きます。ですが、ご記憶ください。私の忠誠は、天神地神、どの神に誓っても貴方一人のものです」

最後にその姿を目に焼き付けて、リオンは身を翻した。

遠ざかっていくその足音が消えて短いとは言えぬ時が過ぎてから、王は立ち上がり、隠し通路の扉を閉めた。

「お前が正しいか、余が正しいか。それは時の流れが決めることだ。だが、まあ、自分の足で立つてくれるというのなら、余も荷が降ろせるというものだな」

苦笑と共に、そう呟く。

それを聞くものは、いなかった。

*

省吾は不意に止んだ弾雨に、内心首を傾げた。

ややして、軽い足音が響く。それはあの男のものでは在り得なかった。

数歩で止んだそれを確かめようと、省吾は柱の陰からわずかに身を乗り出した。そして見えたものに、一瞬呼吸が止まる。広間のほぼ中央に立っていたのは、彼女だった。

「お前、キーツ！ 彼女を下がらせろ！」

だが、省吾の怒声に対して返された台詞は、まさに彼の血を全て噴き出させかねないものだった。

「お前が代わりにそこに立てばな。そろそろ互いに弾の無駄遣いだろう？ 終わりにしようや。あと五つ数える間にお前がその柱の陰から出てこなければ、イチの右足を撃つ。更に五つ数えても出てこなければ、今度は左足だ。どうだ？」

「無駄なことだろ！？ 彼女は銃の弾なんて簡単に防げる筈だ」

「ひとつ。ああ、普通はな。ふたつ。だが、俺がやるなど言えば、やらん。みーっつ」

「彼女はあんたの味方じゃないのか！？」

殆ど血を吐くような省吾の声に、キーツは嘲笑を返した。

「ああ。大事な大事な、俺の取って置きだ。だから、撃った後にすぐ治療してやるよ。よーっつ。……さあ、どうする？」

考える余裕は、無かった。

「いつ……っつと、出てきたか」

省吾は、姿の见えないキーツの声がする方向を睨みつけながらゆっくりと中央に歩き出る。

「いい心掛けだな。まあ、女の子に怪我させるわけにや、いかねえもんな」

気配で、省吾は自分に照準がぴたりと合っていることを察する。

かちりと、撃鉄の上がる音が微かに響いた。

人形のように佇んでいる少女から、できるだけ離れる。

全神経を耳に集中し、その時を待った。

最初の銃声。

省吾は、被弾覚悟でその銃声がした方向へ全弾を撃ち尽くす。あとは、相手の放った弾が自分の身体に食い込むのを待つだけだった。が、すぐに訪れる筈のそれは、優に一秒を数えた後でも感じられない。

省吾は両目を開け、そこにあるものを視界に収め、驚きの為に更

に目を見開いた。

「止まって、る……？」

指先で突付いても、数十発はあるそれらは微動だにしなかった。

「あんたが、やったのか……？」

他にこんなことができる者がいるわけが無い。省吾は少女を振り返った。と、同時に、弾丸が床に転がる甲高い音が続く。

「何てこった」

いささか間抜けな声を上げ、キーツが柱の陰から姿を現した。彼が隠れていた柱には、省吾が撃った無数の弾丸が小孔を穿っている。そして、銃を手にしている方の腕には、赤い液体が伝っていた。

「イチ？」

悲嘆に暮れている、という表現すら当てはまったであろうキーツのその声音に、少女が視線を向けた。

「すみません、キーツ大佐」

「お前、俺を裏切んのか？」

貞淑だと信じていた妻に不貞を働かれた夫でさえも、これほど情けない声は出せないだろう。

少女の真紅の瞳に見つめられていることを感じながら、キーツは続く言葉を呆然と聞いていた。

「わたしは、この人と会って、『怖い』ということを知りました。

この人がわたしを恐がるのが『恐く』、この人が死んでしまうのが『怖い』と思いました。わたしは、キーツ大佐といっしょにいても、『死ぬこと』が怖いとは思えないのです。それは、『生きている』とも思えないということなのです」

少女は、未だ信じ難い思いを満面に表している省吾へと視線を移した。

「この人といると、わたしは『生きている』と思えるのです」

細い声で、たどたどしい口調。

その陶磁器のような頬には、いつしか透明な雫が伝っていた。相変わらず一本調子ではあったけれど、省吾はやっと、彼女の声

が聴けたと思った。

「キーツ大佐。わたしはこの人といっしょにいきたいです」

少女は、キーツにそう告げる。

まともにイチの視線を受けたのは、これが初めてかもしれない。

キーツは唐突にそう思った。大きく息を吐き、肩を竦める。

「ちっ、これで俺の出世計画もおじゃんか」

「キーツ大佐？」

「さっさと行けよ。そのクソ餓鬼と一緒によ」

そう言つて、キーツは背を向けた。

「ありがとうございます、キーツ大佐」

何度も投げられたその言葉だったが、キーツの耳は確かにこれまでのものとは異なる響きを感じ取っていた。

まあ、いいか。

確かに、これで全てを失うことになるが、キーツは意外なほど、未練を感じなかった。

キーツの背を見つめたままの少女を、省吾は自分の方へと向き直らせる。しっかりと、その真紅の瞳を見つめた。

得難い、二つの宝石。

そこから溢れ出す透明な雫を、指で拭う。何か不思議な気持ちがある。彼女のこの瞳が流すとしたら、血のような色をしているのかもしれない、思っていたから。

「俺があんたに新しい名前をやるよ。……今日から、あんたは小夜だ。夜が明ければ朝が来る。夜が無ければ、朝は来ない。あんたは俺に、朝をくれたんだ」

少女は軽く首を傾げて、何度かそれを口の中で転がした。変わらぬ平坦な口調で、ポツリと言う。

「小夜。わたしは、この名前が気に入りました」

いつか、小夜は笑ってくれるかもしれない。その時は、またいつそう明るい朝が訪れるだろう。

省吾は小夜を両腕で抱き締めた。細い肩が、すっぽりと自分の中

に納まる。

この少女は、これから、様々な事に怯えるだろう。だが、これからは省吾が、それら全て、一つ一つ拭い去っていったやるのだ。ふと視線を上げると、初めて開放されたままの入り口に立っているロイに気付く。

「たいしたものだ、省吾」

彼の口がそう動いたのが、見て取れた。

省吾はロイに、会心の笑みで返した。

*

再び隠し通路から炊事場へ戻ってきたリオンは、そこに一人きりで残っているエルネストに奇妙な目を向ける。

あまりに彼の纏う空気は暗かった。

「エルネスト？何をやっているんだ？」

エルネストは、たつぷり呼吸三回分はじっとリオンを見つめ、最後に大きく息を吐いた。

「いえ、別に。ただ、もしもあなたが戻ってこなかったら、王を討ちに行き、それから私も首を斬ろうと思っていたところですよ」

リオンはそんな従者を呆れたように見返す。

「そんなことをすれば、あの世で私がお前の首を斬り落とすぞ」

「構いません」

事も無げにそう答えたエルネストに、リオンは心底からの呆れ顔を向ける。

「私よりも、お前の方がよほど融通が利かないと思うのだがな」

そうぼやいて、リオンはエルネストを促して走り出す。

「退却だ。行くぞ」

終

「さて、ここでお別れだな」

街道の分岐点で、勁捷は右手を差し出した。省吾はそれをしっかりと握り返す。

「本当に、お前ら、放浪生活を続けんのか？」

固く握った手を解き、勁捷がそう問いかける。

「ああ、いつかはロイの村に行くかもしれないが、暫らくは小夜と二人であちこち見てこようと思う」

初めて喉も裂けんばかりに大声を出したあの時以来掠れが治らない声で、省吾が答えた。

「もしかしたら、あの熱血兄さんの手伝いやってるかもしれないし？」

必ず民が己の手で道を切り開いていく国を創るのだと息巻いていたりオンを思い出し、何となく笑みがこぼれる。

「ま、色々なことを覚えてこいよ。前にも言っただろ？ 生きる以外のことを何か見つけろってな」

じゃあな、と歩き出したその背中に、省吾は最後に一つ問いかける。

「あんた、本当のところは何者だったんだ？」

勁捷の足が止まる。が、振り返ることは無かった。

「自分の秘蔵っ子をぶっ潰されて怒り狂った偉い人が派遣した、秘密の兵隊さん」

再び足が動き出す。勁捷は、肩越しに片手を振ってみせた。

「けいしょうがおこられないといいです」

広い背中を見送りながら、小夜がそう呟いた。

「何で？」

「わたしをこるさなかったから」

「……そうか」

省吾は小夜の頭を片手で抱き寄せる。そして、勁捷とは反対の方
向へ歩き出した。

やっぱり省吾は日向だ。

小夜は思う。

リオンでも、エルネストでも、けいしょうでも、ロイでも暖か
かったけれども、省吾が一番暖かい。

わたしも省吾の日向なのだろうか。

小夜は、そうであればいいな、と思う。

*

この年三度目の食糧援助を求めてやってきたザアルツクの使者は、
王の言葉に、狼狽のあまりしどろもどろになった。いつもどおり難
なく要請が聞き入れられると高を括っていたのである。

「お、王！？ 今、何と仰いましたか？」

目を見張っている使者に、王は眉根を寄せた困惑の表情で告げた。
「私も困っているのだよ。使者殿も巷の噂は耳にしているだろう？
義賊気取りの輩が我が国の貯蔵庫を荒らしては、そこに蓄えられて
いる食糧をばら撒いている、と」

「え、ええ。確かに」

そう答えて、使者はやや口籠った後、続けた。

「そういう者どもがいることは、道中聞き及んでおります。しかし、
賊どもの頭目が……その……王への忠誠を口にしている、とも……」

「そうか？ ふむ。何のつもりなのだろうか」

人の表情を読むことに長けている使者にも、この王の真意を測る
ことは難しかった。

「まあ、そういうことだ。我が国にも貴国に援助をするだけの余裕
は無くなってしまったのだよ」

心底残念そうな顔。それが本心であるのかは、使者には判らな
かった。

唯一つ、彼にもはつきり解っていること。

それは、この国からの援助はもう望めないということだった。

ザヤルツクからの使者がすこすこと扉の向こうに姿を消した後、王はポツリと独りごちる。

今、国中を騒がせている『義賊』とやらは、国の備蓄を食い荒らさない程度の絶妙なバランスでしばしば砦を襲い、その収穫をばら撒かれている国民たちは、徐々に潤い始めている。

「さて…狼になるか、それとも羊のままか…。ひとはどちらに転じるのであるのかな」

それに応えるものは、今はまだいない。

結論は、時が出すのだ。

終（後書き）

読んで下さってありがとうございました。感想、評価などいただけたら嬉しいです。

とりあえず、二人は旅立ちましたが、彼らの関係が変わっていく後日譚を、サイドストーリーでお伝えしていきたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1494z/>

夜を越えて巡る朝

2011年12月5日10時49分発行